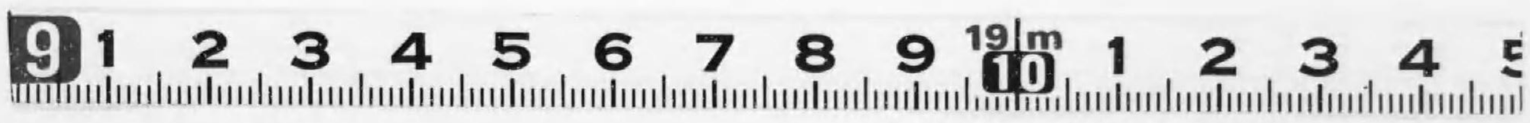

502 113

502-113

不良少年になるまで

警視廳監察官
警察講習所教授
鄉津茂樹 著

東京 巖松堂書店 發兌

大正
11. 6. 24
内交

凡例

一、本書は著者が曩に警察講習所で講義した『不良少年問題』の速記の一部に幾分訂正増補したものであるが、努めて當時の通俗的な口調を殘そうとした爲め、却て十分な補正が出來なかつたと思ふ。

一、不良少年問題に就ては、更に少年處遇及び保護問題に論及し、猶ほ少年裁判法及び矯正院法の大體を說述する必要が有るが、本書は『不良少年になるまで』の各種の原因を探究して少年の不逞に陷る經路を示し、少年處遇及び保護の基礎を明かにするに止め、其等の諸問題に關しては、後日筆を新たにして讀者に見ゆる考である。

一、本書は元良勇次郎、富士川游、福來友吉、丘淺治郎、谷田三郎、山岡萬之助、永井潛の諸博士高島平三郎、寺田精一、關寬之の諸氏の著書に學ぶ所

甚だ大なるものが有り、又本書出版に際しては富益義衛、宮下吉造兩君の盡力に負ふ處多かりしことを錄して爰に感謝の意を表したいと思ふ。

青葉薫る頃城西の官舍にて

著者識す

不良少年になるまで　目次

緒論

第一章　不良少年問題研究の價値……一
第一　不良少年の概況……一
第二　社會事業としての少年救濟問題……三
　救貧事業……免囚保護事業
第三　少年問題と婦人問題……六
　避姙運動……尙古思想……家屋庭園の構造及び家具の配置
第四　少年問題と家庭問題……一三
　無智の愛……遺傳
第五　少年問題と修養問題……一九
第六　少年問題と經濟問題……一九

第七　少年問題と思想問題……二二
人生と少年期
第二章　兒童學研究の過程……二八
第一　哺乳的興味……二八
第二　情操的興味……二九
第三　科學的興味……三〇
本論
第三章　少年の意義……三五
第一　總說……三五
第二　法律上の少年期……三六
第三　生理學及び心理學上の少年期……三八
第四章　少年の生理……四〇
第一　胎兒及び嬰兒期の生理狀態……四〇
(一)　胎兒の生理……四〇
(二)　胎兒の心理……四四
胎教
(三)　嬰兒の生理……四七
律動的變化……心身發育の均齊
第二　幼兒期の生理狀態……五九
(一)　幼兒期の特徵……五九
犯罪定型……遊戲……食事……入浴……鼻疾……耳聽……齲齒……病兒の取扱
(二)　都會の兒童と田舍の兒童……六九
第三　少年期の生理狀態……七四
(一)　骨格筋肉の發達……七四
(二)　消化機能の發達……七四
問食……過食
(三)　腦髓の發達……七七
夜尿症……視覺……觸覺……嗅覺……味覺

第五章　少年の心理……八三
第一　嬰兒期の心理狀態……八三
遺傳……嬰兒の泣聲……嬰兒の睡眠……嬰兒の手工能力……嬰兒の語能
第二　幼兒期の心理狀態……九四
(一)　感覺作用……九四
疲勞……音樂
(二)　感情作用……一〇〇
破壞本能……殘忍性
(三)　衝動作用……一〇二
潛在意識……自我觀念……蒐集本能……玩具の選擇……玩具の心理的價値
第三　少年期の心理狀態……一一六
(一)　知覺作用……一一六
感覺と知覺……知覺の錯誤……注意
(二)　想像作用……一二〇
虛僞性……童話
(三)　記憶作用……一二六
習得……把持……再認……統一
(四)　感情作用……一二八
美的感情……智的感情
(五)　推理作用……一三二
觀念……概念……判斷……推理
第六章　少年の不良性……一三三
第一　總說……一三三
第二　盜癖……一三四
(一)　所有の觀念……一三四
選擇……聚集本能
(二)　盜癖の原因……一三六

つ
(イ)虚榮……(ロ)惡戲……(ハ)恐怖……(ニ)摸倣……(ホ)疾病……犯罪系統
婦人の月經と犯罪……(ヘ)性慾……(ト)趣味……(チ)脅迫……境遇
と犯罪
第三　嘘言癖……一五一
(一)　嘘言の種類……一五二
(イ)無意識的嘘言……(ロ)有意識的嘘言
(二)　嘘言の心理……一五二
(三)　嘘言の原因……一五五
(イ)恐怖……阿諛……(ロ)復讐……兒童虐待防止運動……(ハ)虚榮……
(ニ)興味……(ホ)利慾
第四　買喰癖……一五六
(一)　間食の必要……一六一
(二)　間食の弊害……一六二
恩惠……報酬……盜性……浪費性……少年と金錢
第五　射倖性……一六三
(一)　競技と賭事……一六六
(二)　射倖性の原因……一六六
優勝慾……想像作用……貪慾性……射倖的遊戲
第六　浮浪性……一六七
(一)　浮浪の心理……一七一
(二)　浮浪の原因……一七一
(イ)還境……兒童の躾……家庭と娯樂……(ロ)摸倣……(ハ)誘惑

第七　殘忍性……一七八
(一)殘忍の心理……一七八
(二)殘忍の原因……一七八
(イ)變態性慾……(ロ)復讐
第八　模倣性……一八二
(一)摸倣の心理……一八五
(二)模倣の條件……一八七
(三)摸倣の價値……一八八
活動寫眞……刊行圖書
第九　弄火癖……一九二
(一)好火の心理……一九二
(二)好火の原因……一九三
(イ)變態性慾……(ロ)刺戟……(ハ)破壞本能

第七章　不良少年の原因……一九八
第一　生理的原因……一九八
(一)遺傳と不良少年……一九八
犯罪定型……破壞本能……作虐本能……形觀學……メンデルの法則……
注意の散漫……記憶の減退……心身活動の不統一……趣味の枯渇
(二)健康と不良少年……二〇七
體格……營養……外傷……既往症
第二　家庭的原因……二一七
(一)家族關係……二一七
(二)生活關係……二一七
勞働少年
(三)家庭の感化……二一三
結婚の時期……家出の原因

第三　教育的原因……二二九
(一)　少年の教育……二二九
義務教育……學業の成績……學科の興味
(二)　家族の教育……二三二
(三)　教育の普及……二三三
第四　宗教的原因……二三四
(一)　宗教の必要……二三五
(二)　少年の宗教觀念……二四四
第五　職業的原因……二四七
(一)　家族の職業……二四七
(二)　少年の職業……二五〇
(三)　少年の失業……二五二
第六　社會的原因……二五三
(一)　社會環象……二五三
(二)　經濟關係……二五五
(三)　都鄙關係……二五七
健康……智能……誘惑
(四)　文化關係……二五九

——(目次終)——

不良少年になるまで

法學士　鄉津茂樹著

緒論
第一章　不良少年問題研究の價値
第一　不良少年の概況

世界大戰は有らゆる方面に、改造の機運を齎したが、吾々が眞に社會を改造し、人類を改造して行くには、先づ社會の將來を荷負ふて立つべき、吾々の後繼者である少年を改造して行からければならない。此意味に於て、不良少年問題の研究は極めて重大な意義が有ると謂はなければならない。

此の問題を論するに先立ち、現今我國に於ける不良少年は如何なる情勢に在るかを述べるの必要が有る。大體に於て、我國の在監者、殊に累犯者は、年と共に稍減少の傾向を示して居るが、是は刑事政策上から、檢事の不起訴處分の範圍が擴張された結果で、犯罪其者は年を追ふて增加しつゝあることは勿論、殊に少年犯罪は近來非常な勢で增大しつゝあることは、掩ふべからざる事實である。殊に吾々の最も注意しなければならぬ點は、此の少年犯罪者の中に、一回乃至數回起訴猶豫の處分を受けた者が、意外に澤山含まれて居ることである。大正九年五月小田原少年監獄の囚人は百八十七名であるがその中で一回乃至數回起訴猶豫の處分を受けた者が九十三名ある、是等の點から考へても、少年犯罪と云ふものは、如何に犯し易く、重ね易きものであるかと云ふ事が判り、現在の監獄制度を以ては、到底犯罪少年を撲滅するに足らないと云ふことが數字の上に明かになつてゐるのである。

尙最近の統計に依つて見るに、大正七年度の全國に於ける刑法犯罪者は二十四萬五千八百七十七人で、其中二十歲未滿の犯罪者は三萬九百六十九人、之れを內譯すれば、十六歲迄が一萬五千三百十人、それ以上二十歲未滿が一萬五千六百五十九人で、二十歲未滿の刑法犯數は實に全體の一割二分四厘强に當つて居るが、未成年者の犯罪の大部分は警察署の微罪處分若くは檢事の不起訴處分に附せられて居るから、實際の少年犯罪の割合は、此三倍にも四倍にもなつて居ると見てよい。

第二　社會事業としての少年救濟問題

抑も社會事業といふ事は、社會の缺陷を除去して、さうして、社會の健全なる發達を促進する事業である。或は防貧事業であるとか、或は免囚保護事業であるとか、其他種々なる救濟事業があるが、其中でも此少年救濟の問題は、最も重大なる事業の一つになつて居るのであも。防貧事業も、免囚保護

も、共に必要な社會事業であるが、防貧事業は既に出來上つた社會の落伍者を、如何にして救濟すべきかと云ふ問題に過ぎない。免囚保護事業は既に犯罪者として國家の處罰を受けた者を、出獄後に於て、如何に之れを善導するかと云ふ問題に過ぎない。然し乍ら不良少年の問題は、將來犯罪を犯す虞れのある所謂犯罪の卵を救濟する事業である。此意味から謂へば、社會事業中に於て、最も重要な、最も興味ある問題であると云ふことが出來るのである。

近時經濟界の變調に依つて益々此不良少年なる者が增加の傾向を示して居るのであるが、爰に面白い一つの實例を擧げるならば、大正四年度に吾國に於て自殺した人の總數は一萬二千五百六十五人ある、其中で十六歲未滿の者が百七十七名、二十歲未滿の者が八百八十八人ある、それから其翌年の大正五年になると、自殺者の總數が一萬一千七百九十七人、其中で、十六歲未滿の者が百七十二人、二十未滿の者が八百十七人と云ふ數になつて居る。二十歲未滿十六歲未滿と云ふ少年が自殺すると云ふことは、餘程社會問題として注意しなければならぬ事柄である。未だ世の辛酸を知らない神の如き少年から斯く多數の自殺者を出すと云ふことは、吾々の大いに注意しなければならぬことであると思ふ。

斯くの如き各種の現象から考へれば、近時此不良少年問題が社會の各方面に亘つて、熱心に考究せられつゝあることは、誠に當然のことゝ謂はなければならない。されば歐米各國に於ては、既に少年保護事業と云ふものが、熱心に研究され、又實行されて居るのである。吾國に於ては、此事業に就き、未だ歐米の先進國に比すべきものはないが、近時此問題が有識者間に盛に論議された結果、どうしても此問題は一日も早く解決しなければならぬと云ふことに一般が氣が付いて來たのである。御承知の通り第四十四議會に於ては少年裁判法及矯正院法と云ふものが提案されたのであるが、不幸にして、會

期中に議決を見ることが出來なかつた。然し早晩是等の法案は法律として發布せられる運命になつて居ることは申す迄もなく、此法案の發布に依りて、此少年救濟事業の上に、一段の進歩を見ることは、疑なきことである。

以上は吾國に於ける不良少年の概況を述べたに過ぎないが、更らに進で少年問題はどう云ふ意味のものであるかと云ふことを、論じて見やうと思ふ。

第三　少年問題と婦人問題

先づ最初に考へなければならぬことは兒童と婦人問題との關係である。謂ふ迄もなく、子供を産むと云ふことは、婦人の獨特の仕事で、家庭内に於て兒童の敎養の任に當るものは主として此婦人である。婦人問題と少年問題とは、斯くの如く密接な離る可からざる關係があるのである。然るに此點に就て婦人の間に、甚だ遺憾なる傾向が表はれて居はしないかと思ふ。尤も、之れは獨り吾國のみではなく、亞米利加に於て、最近此傾向が最も著しいようである。卽ち近來享樂主義とも云ふべき思想の影響を受け、婦人が多數の子女を養育することは、一種の屈辱であるが如く考へられる傾向が表はれて來た事である。卽ち子供を産むことは誠に厄介なことで、婦人の最も大切な容姿は之が爲めに非常に衰ろへて行くばかりでなく、子女の養育に多くの費用と時間を要し、之がために生活上の不安を高め、一面に於て夫婦の享樂を阻害することが多い。だから、子供は成るべく産まないやうにすることが、人間生活の上に必要なことである。婦人は決して子供を産む機械ではない。自分に必要な程度に、子供を産めば其でよいので、それ以上産む義務はないと云ふのである。此新マルサス主義とも謂ふべき思想は、今日到る處に唱へられて居るのであるが、亞米利加などに於ては、避姙協會卽ち姙娠を避けると云ふ所の協會があり、大袈裟な宣傳が隨所に行はれて居るのである。最近紐育で數百の妙齡の婦人が、音樂隊を先頭に隊伍をつくつて大に避姙の宣傳をした

といふ事であるが、彼等の用ゐたモットーの中には、或は「吾等に避姙の自由を與へよ」だとか、「避姙は天意なり」といふ様な奇驕なものが有つたといふ事である。

然るに近來我國に於ても、稍もすれば斯様な忌はしい風潮が、所謂新しい婦人と云ふやうな人々の間に表れて居るやうに思はれる。殊に私共が、常に遺憾に堪えないのは、自分の産んだ子供を、自分の乳で育てると云ふことが恰も恥辱であるが如き考を以て、産めば之れを乳母に託し、長ずれば家庭教師を雇入れると云ふやうに、漸次、子供を家庭から疎隔し、兩親から遠ざけやうとする一種の虚榮が上流の家庭に見られることであつて、洵に痛嘆に堪へぬことである。

斯の如き思想は極端な個人思想の一つの表はれで、子供を産み、之れを養育して行く、婦人の尊き天職、大切な責任を忘れたものと謂はなければならぬ。

次に之れは特に東洋思想の一つの缺陷であると考へられることは、由來、東洋人には古を尊び祖先を敬ふと云ふ思想が非常に強烈で、今日我々の家族制度の眞髓を爲して居るのである。固より祖先を尊び、親に孝養すると云ふことは、人倫の大本で、凡百の道德の根源をなすことは謂ふ迄もないが、親あるを知つて子あるを知らない家庭は決して發達を望む事は出來ない。

東洋の諸國が多く衰亡の慘狀を見るに至つた原因の一つは、此思想に胚胎して居るものではないかと思ふ。現に支那では、老親に孝養するがために、手足纏ひになる赤ん坊を穴の中に生埋めにした大罪人を、二十四孝の中に加へ、日本では病親の醫料を得るために娘の身を賣つた大馬鹿者を、孝子の鑑にして居るが、之れは大變誤つた考へだと思ふ。固より、祖先を尊び、親に

孝養を盡すと云ふことは、大切なことに違ひないが、それよりも大切なことは、自分の後繼者であるところの、又此國家の將來を背負つて立つべき所の子供を愛すべきことである。之は人類の發達の上に、吾々の最も大切な義務で、此義務を果すためには、先つ第一に子供を中心とした、子供を本位とした家庭を建設する事が最も急務であると思ふ。

昔羅馬に大變華美の風の盛んな時代があつたが、婦人などは著物から頭の飾物に至る迄、善美を盡して、互に誇り合ふ習慣があつた。或る時コルネリアと云ふ夫人の家に、さう云ふ會が開かれて、大勢の婦人達が、お互に一番大切にして居る著物や寶石などを出し合つて、誰のものが一番よいかといふ品定めをした處が、コルネリア夫人丈けは、何物をも示さず最後迄默つて居た。そこで他の夫人達は、コルネリアに向つて貴方には私共に見せて下さる寶が無いのかと尋ねたら、コルネリアは卽座に皆さんにお目に掛けようと思ふ私の寶は是ですと云つて、生れて間のない男の兒を見せたので、一座の者は唖氣にとられたと云ふ事である。此子供はガイウスと云ふ名で、後に羅馬の護民官と云ふ偉い役になつた人であつたので、夫の沒後、時の王樣から后に所望されたが、夫人は之を退けて專心ガイウスの養育に力を濺いだのであると云ふ事である。

私は常に申して居るが、吾々の家庭について考へて見るに、動もすれば、子供は家庭の附屬物である、厄介者であると云ふ樣な意味に取扱はれて居る。子供は家庭の中心である、家庭の核心であると云ふ觀念が、一般に乏しくはないかと思ふのである。

先づ吾々の家庭の構造から見ても、此點が頷かれると思ふ。例へば庭園にしても、池を穿ち山を築き石を配すといふ風に、ざこ迄も老人本位に出來てゐる。之は藝術的方面から觀たなら、或は價値が有るかも知れないが、子供本

位といふ點から觀れば、決して結構な事ではない。私は寧ろ一面青々とした芝草でも植へた、子供中心の庭園が望ましいと思ふ。子供等が思ふ存分飛び踏ねることの出來る、自然の遊戲場が望ましいと思ふのである。

次に家屋の構造や、家具の配置でもさうである。紫檀の机で廣くもない座敷を塞げ、隅々には金屏風を立て廻し、高價な骨董品を處狹まく陳列して、獨り悦に入つて居る家庭は澤山あるが、子供の遊戲場の設備に就て考へてる家庭は殆どないと云ふても宜い位である。

或る西洋人は曾て私に「日本人位子供を可愛がる國民はないが、又日本人位子供を虐待する國民もない」と謂ふた事が有るが、之は日本人は一般に子供に就ての理解に乏しいと、いふ意味である。母親は子供と添寢するもの、子供には二六時中乳を飲ませるものと考へて居る間は、決して健全な國民は作られない。日本の子供が、概して獨立心に乏しく、又一般に身體が虚弱であるのは、斯うした無理解な母の手に生育する結果であると思ふのである。

第四　少年問題と家庭問題

西洋の諺に「子供は大人の教師なり」と云ふことがある。これはどう云ふ意味であるかと謂ふと、吾々には子供を教育する所の義務がある、若し此義務を完全に盡さうと思ふならば、どうしても先づ子供を學ばなければならぬ。さうして子供から教はらなければならぬと云ふ意味である。又西洋の諺に「子供は兩親の鏡なり」と云ふ事が有るが私共が多數の不良少年を取扱つた經驗から見ても、不良少年になる原因は大概家庭の缺陷から來ることが判るのであつて、此意味から謂つても、子供は兩親の鏡であり、寫眞であることが判る。

私は此「不良少年」と云ふ言葉を用ふることが、既に不愉快である。世に不良少年と云ふものは有るべきものではない。「不良少年」の代りに、「不幸

なる少年」と云ひ度いと思つて居るのである。

「私は曾て一人の不良少年を預かつたことがある。それは或博士の息子で、その家庭は最も嚴格な殆ど摸範的の家庭であつたにも拘らず、其子供は非常に不良性を帶びて居つて、自分の家庭内で矯正することが出來ないと云ふので一時私が預つたのである。私は其少年に對して色々に手を盡して感化に努めて見たが、素より私の力の足らない爲めに、日に〳〵不良性が加はる斗りであつた。當時山口縣美禰郡秋吉村に本間俊平と云ふ人が、不良少年の感化に從事して居られた。私は以前先生を數回訪問して屢々その敎を受けたことがあるので、博士と共に件の少年を先生の許に連れて行つた。其時私は先生が定めし少年に向つて血の出るやうに訓戒があるに違いないと期待しつゝ、子供を前に置いて、其成育の經過や不始末の數々を話し、只管、先生の薰陶を依賴したのである。然るに先生は子供には目もくれず、先づ父親に向つて、非常な劍幕で訓戒を與へられた。其時私は自分の耳を疑つた位であるが、一人の不良少年を出すのも、家庭に缺陷があるからである。矢張り罪は兩親にあるのだと云ふことを痛切に感じたのである。吾々の眼から見ると、立派な家庭である、立派な人格者であると思はれる人の家庭に、往々にして恐るべき不良少年を輩出することがあるのは、注意すべきことである。

此等の缺陷の中で、私が最も深く感じて居るのは、無智の愛である。よく昔から老婆育ちは三百安いとか言ふが、老人の手に育つた子供は、老人の無智の愛に養育せられる結果、非常に精神が低格であり薄弱になり易いのである。無智の愛程子供に取つて惧るべきものはないと思ふ。

それから私共が不良少年に就て、其原因を調べて見ると、遺傳から來る場合が多いのである。卽ち祖先の精神系統の缺陷が遺傳的に少年の精神を薄弱ならしむる場合が多いのである。遺傳の中でも、酒毒や結核の遺傳は最も惧

るべきものである。酒を止めなければならぬと云ふ禁酒運動は、現に亞米利加等に於ては殆ど全州に亙つて行はれて居るのである。富士川博士は曾てアルコールが兩親の身體に働いて居る間に受胎した場合は、其胎兒は大部分精神薄弱になると云ふことを謂はれた。酒飲みの子供に不良少年が多いことは、吾々の常に經驗する所であるが、或學者の說によると、酒に醉ふて居る間に受胎した者は多く不良少年になると云ふのではなく、斯樣な場合には全部智能低格者、精神薄弱者となると云ふ議論さへあるのである。生れながらにして精神薄弱者となり、生涯不幸な生活を送らなければならぬとは、何たる悲慘な事であらふ。前に述べた博士の如きも、丁度其子供が受胎した當時は非常な酒飲みであつた。其酒毒が遺傳を爲して、子供の精神に缺陷を來したのである。

それからもう一つ考へなければならぬ事は、獨力苦學で學位を贏ち得たと

か、或は空拳で巨萬の富を積むだといふ樣な人は、普通人よりも頭の勝れた偉い人である。さう云ふ人は、自分の子供も、自分と同じやうに、進み得るものであると云ふやうな感じを持ち易い。自分は何歲の時に斯う云ふ本を暗誦したと云ふやうな自分の經驗から、自分の子供も同じやうに出來るものと考へ易い。然しその子供は酒毒のために、生れ乍らにして不幸な精神薄弱者である。病人に健康體の人よりも重い荷物を無理に負はせやうとしたり、病人に重い荷物を脊負はせた上、頑丈な人と競爭を命ずるのは甚だ殘酷なことと謂はなければならない。斯樣な少年が遂に不良の仲間に陷るのは、畢竟其苦痛に堪へられないために、誤つた慰安の道を求める結果で、子供も一つの虛榮を有つて居る、强烈な虛榮心に燃ゆる少年が、親から命ぜられる迄もなく、親が命ずるよりも更らに大きな荷物を脊負つて意張つて見せてやり度いと思ふのは當然であるが、情ない事には、自分は生れ乍らの病體である。小

さな荷物さへ抱へる事が出來ない。然し親はそんな事には些つとも頓着なく、重い荷物を脊負はせて走れ〳〵と鞭打つのである。少年は到底其苦痛に堪へられない結果が、此苦痛の慰めを何れにか求めなければならぬ。彼等が活動寫眞や芝居に走り、或は飲酒や女色に走るのは當然である。

されば吾々が子供を敎育するには、先づ子供を知らなければならない。殊に子供の氣力體力を充分に知ると云ふことが最も肝要である。

所謂無智の愛に溺れて、蒟蒻玉の樣な子供を作上げることはよくないことであるが、子供の本當の力を知らないで嚴格一點張りで押し通すことは、更に避けなければならぬことである。さう云ふやうな點から見ても、實に子供と云ふものは兩親の鏡である、不良少年と云ふものが若しありとすれば、それは家庭の缺陷から來たものである、家庭の缺陷の反射であると言ひ得るのである。

第五　少年問題と修養問題

以上說明した所から見ても、不良少年問題は、吾々自身の修養上重要な意味を有つて居ることは謂ふ迄もない。私は固より宗敎家でもなければ道德家でもない。人を感化するとか矯正するとかいふ力がない、又左樣な資格もない者であると云ふことは萬々承知して居るのであるが、人間は常に人を薰育する、敎化する所の地位にあり度いものである。お互が常に何人かに對して一段上に、一步先きに居ると云ふことは、聽て自己を修める唯一の方法である。吾々が穢ない物を握つた手で奇麗な菓子を摘めないと同じやうに、惡いことをしながら、さういふ地位と云ふものは保ち得るものではない。であるから、吾々が少年問題を研究するのは、一面から謂へば、吾々の修養上必要なことであるといふて宜いのである。

第六　少年問題と經濟問題

それからもう一つ序に述べて見やうと思ふのは、少年問題と經濟問題との關係である。私が常に感じて居ることは、近來少年の經濟智識は非常に發達して居る。到底昔の子供の比ではない。經濟方面に實に鋭い觀察と強い想像力とを有して居ることは、常に吾々の經驗する所であるが、經濟的方面に發達すると反比例に、道義的方面に後れては居はしないかと云ふことを感ずるのである。例へば斯う云ふことは非常に得である、斯う云ふことは非常に損であると云ふ意味に於て、子供を敎養する事は孰れの家庭でも可なり行き屆いて居る樣である。殊に婦人は經濟的に極めて敏捷な頭腦を有つて居る結果、例へば子供が新調の著物を汚して來たとか、買つた斗りの帽子を落して來たとか、玩具を人に遣つて仕舞つたと云ふ場合に、酷く叱るやうであるが、是は宜しくない。斯う云ふ經濟的方面には、出來る丈け淡白に敎養して行かなければならない。其反對に例へば他人に對して不親切な事をしたとか、兩親に詐りを云ふたとか云ふ樣な道義的方面には、嚴格な薫陶が必要である。此兩方面に裁然たる區別を樹てゝ行く事が最も大切な事である。未だ經驗も訓練もない少年に向つて、極端な經濟思想の鼓吹をすることは稽へ物であると思ふ。

私は或小學校の校長から、斯う云ふ話しを聞いたことがある。或時二人の小學生がこんな話をして居た。「君の方の先生よりも、僕の方の先生が偉い。君の方の先生より僕の方の先生が月給が高いから……」と。此の一事から見ても、誤れる經濟思想はどの位子供に危險な影響を與へるものであるかゞ判る。吾々が小學校に通つて居つた當時を追想して見ると、先生は神樣の樣に思つて居た。先生が月給を貰ふとか云ふようなことを考へる暇もなかつたのである。處が此頃の少年はさう云ふ方面に頭が進んで、月給の多寡に依つて先生が偉いとか偉くないとかの標準にする樣になつたと云ふことは、誠に

悲しむべき傾向と謂はなければならぬ。之れは全く家庭に於ける誤れる思想の結果である。

殊に今次の戰爭中には、平職工でも一日七圓八圓と云ふやうな莫大な賃金を得る者があつた。さう云ふやうな勞働者―目に一丁字もない、見識もない、人格もない勞働者が、過分の賃金を貰ふ所からして、心奢り、氣高ぶり、晩酌の相手に子供を膝に寄せて、お父さんは學校に行つたこともないが、一日働いて七圓も八圓も取る、お前等の學校の先生は俺達の三分の一も取れない、學問などは詰らないものだ、餘計なものだ位に太平樂を並べた者も有つたに違ひない。さう云ふ家庭に育つた少年に、どうして先生崇拜の感想を起す譯があらう。私はどうも斯う云ふ風が一般の家庭に漲つて居りはしないかと云ふことを憂ふるのである。

第七　少年問題と思想問題

不良少年問題は又思想問題との間に、密接な關係を有つて居る。近來中流以下、殊に下級の家庭に於て見ることであるが、動もすれば一家を背負つて立つべき家父が、家庭の中心力としての實力を失ひつゝあることである。父親はどつかの役所の小使をして居る、息子は會社に勤めて相當の賃金を貰つて居る、女房も內職が急がしく、娘は工場に通つて居る、さうして此等の收入の合算額を以つて、家庭を維持して行くといふ樣な家庭では、事實上、家父の權力が失はれて行くのは免れない。酒でも飲んで意張り散らして居る時には如何にも親仁らしい顏をして居るが、不斷は子供の前にも餘り大きな顏も出來ないと云ふ家庭がある。さう云ふ家庭では、子供は子供の權利を主張し、女房は女房の權利を主張すると云ふ樣な、恰度、群雄割據の姿で、家庭の中心力となる大切な大黑柱がない爲めに、お互に權利の角突合で統御者が無い。さう云ふ家庭に育つた少年は、到底純良な性格を得ることは困難である。

家庭と云ふ言葉はポートと云ふ言葉から來て居る。卽ち港と云ふ意味である。丁度舟が荒浪を避けて山の陰や窪んだ入江の中に、一時怒濤を避けるやうに、家庭は、社會の荒浪を避ける港である。だから家庭は樂しいものでなければならない。一度び家庭に入ればもう世の中の一切の苦痛も忘れてしまふものでなければならない。所が或る人の言葉に依ると、今日の家庭は本當の意味の家庭ではなくして、寧ろ法廷である。原被兩告が互に口泡飛ばして權利を主張する法廷だと謂ふのである。是れは餘り奇驕な言葉ではあるが、一面の眞理を謂ひ現はして居ると思ふ。

近來個人思想が有らゆる方面に澎湃として起り、其結果は社會上に悲しむべき現象が絕えないのであるが、此際に當つて、若しも吾々の家庭が今述べたやうな悲慘な狀態に陷つたならば、其時は實に家庭と云ふもの、意義が根本から失なはれた時で、其間に生れた子供は決して幸福な少年として生育することの出來ないことは謂ふ迄もない。

最後に此少年期と云ふものが人間に與へられたことに就て、少し述べて見ようと思ふ。抑も人生の少年期と云ふものは、有らゆる意味に於て、他の動物には見られない一つのエポックである。尤も他の動物でも、生れるとすぐ大きくなるのではない。其間に複雜な發達の變遷があることは、人間と違ひはないが、其心理上と生理上との發達の關係から見て、丁度人間の少年期に相當すべき期間を認めることが不可能である。後に說明する處に依つて判明することゝ思ふが、人類に少年期の表はれたと云ふことは、非常に意味の深いことである。で、之れは卽ち人類をして他の動物に比較することの出來ない大きな仕事をなさしむる爲めに、大なる準備を必要とするか、である。此意味に於て特に人生に少年期と云ふものが設けられたものであると觀察することが出來るのである。されば此期間に於て、充分な準備が出來ず、將來活動

の基礎を作ることが出來なかつたならば、其人の將來は立派なものではない。決して人間として完成することは出來ないのである。

稍餘談に亘る處はあるが、私は斯う云ふことを主張して居る。小學生時代に學校の成績の良いのを誇るのは間違つて居る。小學生時代は所謂少年期に於ける準備時代で、專ら心身の規律的訓練に努むべき時であるから、無暗に小さな頭に詰め込まして、學校の成績が良いと云ふて有頂天になる譯にも行かず、又成績が悪いからといつてそう悲觀するにも當らない。此時代には一筋に規律的生活の訓練が命である。其を外にしては何物もないのである。朝は何時に起きる、起きたならば何時に飯を食つて、何時に學校に行つて、何時間遊び、何時間勉強し、何時に床に就くと云ふやうに規律的訓練が必要である。若し家庭内で之が完全に行へたならば、少年期は先づ成功したものと見て差支がない。此大切な訓練を忘れて、無規律な勉強をさせ、其れで學校の成績が良かつたとて、一圖に喜んで居るのは間違ひの甚だしいことで、殊に兩親や家族が子女の成績を誇ることは、最も愼むべき事である。此結果は、兒童の虛榮心を煽り、無益な競爭心を唆り、自尊性を高めることになり、甚しきに至つては、少年期の過度の勉學のため健康を害し、勉學の中途に恨を飲んで殪れるといふやうなことになつては悲慘の極みである。世の中に斯樣な實例は決して乏しくはない。

それからもう一つ少年期の敎養に就て特に考へなければならぬ點は、少年の身の廻りのことは成るべく自分一人でなさしむると云ふ習慣をつけることである。上流の家庭に於ては靴を穿くにも女中が穿かせてやる、著物も著せてやる、お給仕もしてやると云ふ風に、一擧手一投足にも總て人手を借りなければ何事も出來ぬといふ習慣を與へるのは非常に宜敷くないことで、獨立心の乏しい人は多くは少年期に斯うした習慣に染込んだ結果である。

吳々も少年期に於て大切なことは、規律的生活の訓練と、自分の身の廻りは出來る丈け自分の手でさせると云ふ習慣をつけることである。

第二章　兒童學研究の過程

第一　哺乳的興味

本論に這入るに先立ち、兒童學卽ちパイドロジーと云ふものが、どう云ふ風に發達し、研究されて來たかと云ふことに就て述べやうと思ふ。

親が子を愛すると謂ふことは動物の本能で、燒野の雉子、夜の鶴どんな低級の動物でも、自分の子を愛すると云ふ感情は餘り人間と差別がないやうに思ふのである。此兒童學――今日は兒童心理學或は兒童生理學と云ふ一つのサイエンスになつて居るが、之れがどう云ふ風に發達して來たかと謂へば、先づ哺育的興味とでも謂ふべきか、子供を育てることの興味――之は何人でも持つて居ることで、子供が成長するに從つて、手を動かしたり、口を利いたり、這ふとか、立つとか、歩くとか云ふ風に、次第に心理的にも生理的にも發達して行く、其發達を見ると云ふことは、親として殆で他に比すべきものゝない興味を唆るのである。此哺育的興味が、兒童學研究の出發點をなして居ると云ふことは疑のないことである。

第二　情操的興味

哺乳的興味に次いで、一面には、少年の容貌だとか、姿勢だとか、音聲だとか謂ふものを、詩歌に歌つたり、文章に綴つたりすると云ふ興味も起つて來る。此興味は假りに情操的興味と謂ふても宜いだらうと思ふ。古來少年の無邪氣な天眞爛熳な生活を、歌や俳諧に詠んだものが澤山ある。山上億良の

しろがねもこがねも玉も何かせん
まされる寶子にしかめやも

又一茶と云ふ俳人の

露の玉摘んで見たる童かな

明月をとつてくれいと泣く子かな

と云ふやうな句もあるが、要するに、神の様な子供といふものを對象として其處に一種の興味を呼起し、詩歌に之れを詠むと云ふやうな情操的興味も起つて來るのである。

第三　科學的興味

兒童に關する以上の興味は遂に科學的興味として今日の兒童學研究の端を開く事になつた。從來心理學は、哲學の一部として考へられて居つたのであるが、其後心理學の發達に伴ひ、哲學から分離した一つの學問として、考へられることになつたのであるが、殊に最近に至りては、心理學と云ふ意味が大變擴張されて、教育心理學であるとか、社會心理學であるとか、或は經濟心理であるとか、宗教心理であるとか、軍隊心理であるとか、集合心理であるとか、犯罪心理であるとか、潜在心理であるとか、民衆心理であるとか、進んで動物心理であるとか、植物心理であるとか云ふものが研究されて居る。尤も此動物植物の心理學は、今日に於ては、未だ獨立した學問としては取扱はれては居ないが、早晩之れが獨立した一つの心理學として、研究さるべき傾向を來して居るのである。

心理學の順序から謂へば、植物心理、動物心理に這入り、それから、兒童心理に進んで行くのが、適當かも知れない。此兒童心理に就て、最も早く其意見を發表した人は、ディトリヒ・テイデマン(Dietlich Tiedemann)と云ふ獨乙の學者で、此人は自分の子供が生れてから、成長する間の心理の變化を研究した人である。さうして兒童精神の發達と云ふ著書を公にした。之れが抑々兒童學研究の嚆矢であると言ふても宜いと思ふ。其外、今日獨乙ではコッホ

博士が、兒童心理に就て、特種の研究をして居る。それから近時に於て最も有名なのは、米國のスタンレー・ホール(G. Stanly Hall)と云ふ博士で、殆ど近世に於ける兒童學を完成した人である。又此人の弟子にオスカー・クリスマン(Oscur Chrisman)と云ふ人がある。此人が兒童學(Paidology)と云ふ言葉を作つた人である。此外に英國のドラモンド(Drumond)ワルナ(Warner)など何れも世界で有名な兒童學者である。日本に於ては未だ世界的學者として名聲を走せた人はないが、富士川文醫學博士、野上文學博士、高島平三郎氏は、今日兒童學の研究者として、最も有名な人である。又、本講習所の松井博士も、非常に兒童學に就て造詣の深い方である。

兒童心理は科學的研究の外に、又應用學として何人も之れを實地に應用しなければならぬ學問である。前に揚げたスタンレー・ホールは、「神の存在は兒童の純なる靈に於て初めて見ることが出來る」と云ふて居るが、實に此兒童

程無邪氣な愛すべきものはないのである。

吾々は單に科學的に兒童心理の研究をすることに滿足せず、進んで、善良なる家父として、實際の場合に應用することに努めなければならないと思ふ。

本論

第三章　少年の意義

第一　總說

本論に這入り、第一に少年の意義——少年とは如何なる時期を謂ふかに就て述べなければならぬ。

よく昔から人生を四季に譬へて、少年を春に、青年を夏に、壯年を秋に、老年を冬に譬へて居る。駘蕩たる春、それは確に少年の氣分に相應はしいものである。一體少年とは、何時から何時までの時代を指して言ふべきものであるかと謂へば、一面には、心理的發達の狀態から、又一面には、生理的發達の狀態から考へて行かなければならぬ問題である。

第二　法律上の少年期

我法律の上に表はれた正文の上から、此少年期を定めやうとするのは甚だ困難であるが、刑法第四十一條には「十四歳に滿たざるものゝ行爲は、之を罰せず」といふことが規定されてある。此刑法を制定する當時は、滿十四歳に達して始めて刑法上の責任能力ある者と認め、十四歳に滿たざる者の行爲は如何なる場合でも犯罪を構成することはない、斯う云ふ一刀兩斷的の條文を設けたのであるが、此條文一つを考へて見ると、如何にも不親切な、不徹底であるな、條文としか思はれない。之れがどうして不徹底であるかと謂へば、十四歳に滿たざる者の犯罪的行爲は、如何に之れを處分するかと云ふことに就ては、何等の顧慮も拂はれてないからである。私は此條文を制定する當時は、十四歳に滿たざる者の犯罪的行爲は、刑法以外の特別法を以て、處置を就けると云ふ趣旨で、單純に刑法上の責任能力の時期を定めたに過ぎないものと思ふ。然るに、爾來未だ十四歳に滿たざる者の犯罪的行爲に對する處置に就ては、何等特別法も出來て居ない。是れは、社會政策の上から云つても、又刑事政策の上から見ても、適當のことではないのである。卽ち此缺陷を補はんが爲に、少年法と云ふものが、刑法第四十一條に對する特別法として、提案されることになつたので、單に此刑法の條文のみを見ては、何等の意味もないのである。

又監獄法の第二條には、斯う云ふ規定がある。「二月以上の懲役に處せられたる十八歳未滿の者は、特に設けたる監獄又は監獄內に於て特に分界を設けたる場所に之を拘禁す」と、十八歳未滿の者には、特別なる監獄に拘禁すると云ふ規定である。

それから、民法第三條には、「滿二十年を以て成年とす」と云ふ條文がある是も條文から考へると、十四歳が一つの階段で、十八歳が中切りになり、二

十歳になつて始めて一人前の成年になるとも見へるのであるが、此三つの條文の間には、さうした深い聯絡のあるものとは思はれない。

第三　生理學及心理學上の少年期

それでどう云ふ風に此少年期を定めるかと云ふことに就ては、今掲げた條文を以て説明することは困難で、どうしても、之れは生理學と心理學の兩方面から觀察して、區劃を立てなければならぬ。此事に就ては、便宜上京都の野上文學博士が區分されたのに依つて、説明して見やうと思ふ。

博士の區分は、乳兒期、幼兒期、少年期、青年期と四つに區分されてある。卽ち乳兒期と云ふのは、生れてから一年乃至三年の間を謂ひ、幼兒期と云ふのは、八歳位迄の間を謂ひ、少年期と云ふのは、十四、五歳迄の間を謂ふのである、尤も青年期に就ては、十八歳と云ふ説と、二十五歳迄と云ふ説とがある。此點に就て、私は二十二歳位迄を青年期とするのが適當であると考へて居る。通説では十八歳になつて居るが、私は二十二歳といふ譯は、現代の青年の實狀を鑑みて、通説よりももう少し擴張する必要があると考へるからである。

私は今少年期――大體に於て、七、八歳から十五、六歳迄位の間の生理狀態や心理狀態に就て、述ぶるに先立ち、順序として、乳兒期に這入る前に、胎兒から乳兒幼兒に至る生理上の變化、心理上の變化を僅か計り研究して見たいと思ふが、先づ此等の時期の特徴を一口で言へば、乳兒期に於ては身體の發達が非常に急激である。幼兒期に於ては其發達は乳兒期程甚しくない。稍々緩やかになつて來るが、身體の運動は最も急激になつて來るのである。それから、少年期になると、益々發達が緩やかになる、少年の末期に至つて、一と通り身體の完成を見るのであるが、青年期に入ると、其完成が一度破れ、更に急激な發育を始め、精神上にも肉體上にも一大變動を來たすことになる。

卽ち男性は喉頭軟骨が突出して來る、聲が生へて來る婦人は乳房が大きくなり、月經が始まると云ふ心身共に、大動搖を來たす時期である。

以上に依つて少年期は何時から何時迄を云ふかと云ふことに就ては、大體判明したことと思ふ。

第四章　少年の生理

第一　胎兒期及び嬰兒期の生理狀態

(一)　胎兒の生理

少年の生理狀態を述ぶるには、順序として胎兒の生理狀態から說き進めて行かなければならぬ。

仰も胎兒と云ふのは、母體に生存して居る胚種で、月で云へば九ケ月、日で數へれば二百八十日の間、母體に生存して居るのである。

どう云ふ風にして子供が出來上るかと云ふと、獨逸のヘツケルと云ふ人の書いた本に據れば、母體には卵子と云ふものがある。それから男子の方には精子と云ふものがある。卵子は、よく下等動物の例として引合に出す、アミーバと云ふ最下等の動物と同じ樣に、單細胞から出來上つて居る。只一つの細胞で呼吸もやれば、消化もやる、生殖作用もやるのである。卵子に男子の精子が結合されると、同時に其單細胞が分裂を初める。學者に依つて分裂の時間は一定して居ないが、今日迄研究された處に依れば、分裂を始めてから終る迄七十時間を要する、初めはどう云ふ風になるかと、云ふと㊀形の一つの細胞が、二つに㊥形に分裂する。さうして其二つに分裂したものが、更らに四つになり、八つになり、十六、三十二と云ふ風に分裂する。さうして桑の實のやうなものになる。此時代を桑椹期と唱へて居るが、斯う云ふものが出來上ると、外皮或は外胎葉と云ふものが出來る、それから之れに對して、

內胎葉、中胎葉と云ふものが出來る。外胎葉と云ふのは腦脊髓或は皮膚になり、中胎葉は筋肉であるとか、或は骨格であるとかいふものになり、內胎葉は消化機關であるとか呼吸機關であるとか云ふものになるのである。

さうして人間として生れた時に、細胞の數は幾何になるかと云ふと、二十六兆六千億といふ莫大な數の細胞になると云ふことである。初め此卵子の時の重さはどの位あるかと云ふと、六ミリグラムであつて、其卵子は肉眼を以て辛うじて見ることが出來る程度である。それが、赤ん坊として生れる時には、三千二百五十グラム約八百目になる。卽ち丁度九億五百六十萬倍になる計算である。僅か二百八十日の中に、母親の體內で九億五百六十萬倍と云ふ非常な發達をするのである。之れを出產後の割合から比較して見れば、體內に於ける發達は、如何に迅速なものであり、如何に猛烈なものであるかと云ふことが判る。赤ん坊の時に八百匁、それが二十歲になつて十六貫とすると二十倍に過ぎない、二十年かゝつて二十倍の發達しか出來ないものが、僅二百八十日の間に九億五百六十萬倍と云ふものになると云ふことは、一寸受取れぬ程の早技である。聖書の中に、「神の一日は人の千日に價する」と云ふことを書いてあるが、胎兒の一日は實に、吾々の千日萬日以上に當るのである。

胎兒は此期間に母體內に於て如何に變化するかは頗る興味ある問題である。御承知の通り、ダーウヰンが進化論を唱へて、人間は初めから高等動物として生れたものではない、アミーバと同じやうな單細胞のものから、魚の時代を經過し、鳥の時代を經過し、獸の時代も經過し、順次高等動物として、人間に進化したものであると云ふことを說いて居る。然るに此永い進化の道程が僅か二百八十日の母體內に於ける胎兒の變化の上に、よく表はれて居る。卽ち初めは單細胞の下等動物であつたものが、順次發育して、丁度魚のやう

に、鰓で呼吸をする時代があり、又鳥のやうな時代もあり、或は全身に毛が生えて尻尾迄ある獸の時代もある、それから肺で呼吸する高等動物に變化して行く。此僅かな二百八十日の間に、動物進化の永い歷史が、廻燈籠の樣に寫つて行くのである。

(二) 胎兒の心理

次に胎兒の心理狀態はどんなものかと言ふと、是れは餘程六ヶ敷い問題である。受胎後五ヶ月位過ぎると、胎兒は母體内で動くのが判る。外部から强く押すと、其たんびに胎兒がピク〳〵動くのが判る。此現象かちして、學者は胎兒には運動に感應する作用があると謂ふて居るが、此運動に對する感應は、果して胎兒の精神作用から來て居るものであるか、或は單純な反射的運動に過ぎないかは、大なる疑問である。米國の心理學者ウキリアム、ゼイムスは之れは潛在意識の働きであると云ふ風に說明して居る。此潛在意識に就ては、後に詳しく說明する考であるが、兎に角胎兒が外部の運動に感應すると云ふ事は否定すべからざる事實である。

茲で私は姙婦の心理作用が、胎兒に如何なる影響を與へるかと云ふことに就て、述べて置きたいと思ふ。

昔から支那では胎敎と云ふことを申して居るが、西洋の學者は始め之れを冷笑して居つた傾きがあつた。然し今日に於ては、泰西の心理學者も、均しく胎内敎育の必要を唱へる樣になつた。支那は此點に於て、確かに泰西より一步を進めて居たと謂はなければならない。周の文王と云へば有名な聖人であるが、其母親の大任と云ふ人は、文王が體内に居る間は、所謂「眼に非禮を見ず耳に非禮を聞かず」と謂ひ、苟も禮に背いて居るものは、見ない、聞かないと云ふ風に、修養に努めた結果、文王のやうな聖人が生れたのであると云ふことを言ひ傳へて居る。

よく斯んな話を聞くが、大火に脅やかされた妊婦の産んだ子供の體には火傷の跡が出來るといふ事を申して居る。下田歌子女史の書いた育兒に關する著書に、或小兒が成長するに從つて、一方の足で立ち上る癖がついた。色々醫療を盡して見たが癒らない。そこで、此癖がついた原因を調べて見ると、其子供が未だ胎内に居る頃、母親は毎日の樣に、或る神社に安産の祈願をこめて居たが、其神社の階段に大きな懸額があつて、それに子供が片方の足で立つて居るやうに見へる繪が畫いてあつた。妊婦は毎日其前に立つて、祈願をこめて居る間に、見るとはなしに、其繪が妊婦の眼に散らつく樣になつた。それが產れた子供に、さう云ふ癖を生ずるやうになつた原因である事が判つたと書いてあつた樣に思ふ。

此一例から見ても、妊婦の精神作用が、胎兒に及ぼす影響の極めて大なるものがあることが判る。從て妊婦の養生とか修養とか、云ふことは、胎兒の敎養上、大なる注意を要することは勿論である。

不良少年の家庭を見ると、多くは貧困の家庭に育つたとか、或は早く父に別れたとか、不義の子といふやうな者が大多數を占めて居る。其等の原因の一つは、妊娠中母親の心理狀態が、其胎兒に惡るい影響を與へたものであらうと思はれるのである。

猶ほ、婦人が精神の昂奮した際に、哺乳せしむる事は、非常に危險である。こうゆふ場合には、病的でなく自然に母乳に一種の毒素が發生するため、乳兒の心身を害することは非常なもので、之が爲め或は一時的の中毒を起すものがあり、或は死亡する者もある。之は家庭内で、兩親の最も愼むべき事だと思ふ。

(三) 嬰兒の生理

以上は妊婦の精神狀態が胎兒に及ぼす所の影響に就て、略述したのである

が、次に嬰兒の發育上に於ける特徴に就て、少しく附加へて置こうと思ふ。

嬰兒の身體の中で、一番特徴とも謂ふべきは、頭の割合に大きいことである。出生時に於ける男子の頭の周圍は十四吋、女子は十三吋である。腦の重さは男子は十一オンス、女子十オンスで、腦の重量は丁度全身の重量の四十二分の一になり、腦に用ゆる血液の分量は全身の血液の八分の一になつて居る。此點から見ても、腦と云ふものは、如何に血液を多く要するものであるかが判る。卽ち僅かに身體の四十二分の一しかない腦にして、全身の八分の一の血液を用ひて居るのである。

英國のモーソーと云ふ學者は、頭の血の分量を量る微細な機械を案出した人であるが、此人が子供に六ヶ數い三角の問題を考へさせた所が、頭の目方が次第に重くなるのを實驗したと云ふことである。多く考へる場合には、多くの血を要する。で子供の時には血の循環の最も激烈な時であつて、赤ん坊の頭を押へて見ると、血が頭の上に昇つて居る音が吾々の手にも感ずる位である。

此意味から考へても、腦はよく使へば使ふ程、よく發達するものであると云ふことが判る。何も考へずに居れば、低腦兒になつてしまふ。多く考へ多く刺戟を與へるといふことに依つて、腦は順次發達して行くのである。赤ん坊の手足を盛んに動かして居るのを見ると、秩序もなく、統一もないが、いろんな筋肉を動かして居る間に、腦の發達を促進する結果になるのである。

腦は身體の中心をなして居るもので、此中樞から澤山の分れた神經細胞が身體の凡有方面に行き亘つて居る。さうして手足の運動をするのであるが、昔はさう云ふことは考へなかつた。だから、生れ乍ら口が利けない者は、單に口が惡いのである、耳が聞へなければ耳が惡るいのである、手足の充分に動かないものは手足が惡るいのであると、こう考へて居たのであるが、腦神經

の研究が進んでから、斯う云ふ故障は總て腦の中樞に在ると云ふ事が判つた。

生理學者はよく實驗して居るが、動物を解剖して其大腦に電流を通じると尻尾を動かしたり、手を動かしたりするが、電流を少しでも多くすると、手を動かしたり尻尾を動かす度數が、夫丈け多くなつて來ると云ふ風に、腦の働きが全身の運動に極めて微細な關係を持つて居るのである。

そこで、どうしても、頭の大きいと云ふことは——よく發達して居ると云ふことは——人間向上の上に、一番大切なことになつて來る。英國のクロンエルは有名な政治家であるが、此人の腦の重さが二千三百三十一瓦あつた。それからバイロンと云ふ詩人の腦の重さは二千二百三十四瓦、柱公爵の頭は大きかつたが、腦の重さは千六百瓦で常人より三百瓦多かつた丈けで、クロンエルやバイロンには比較にもならぬ程であつた。で腦をよく發達させて行くと云ふことは、子供の將來に最も大切なことである。然るに、家庭による

と、僅かのことで子供の頭を打つ人があるが、是れは大變宜しくないことで、大正四年から八年迄小田原少年監獄に收容された千六百十八人の中で、頭部其他に外傷のあつた者が。百五十六人あつた事なども、大に味はねばならぬ事であると思ふ。で如何なる場合でも、嬰兒の頭を打つと云ふことは、絶對に之を避けなければならぬことは勿論、彼等の全生涯の運命を支配する腦髓の保護と發育とに就ては、常に最善の注意を拂はなければならぬ。田舍でよく見受けることであるが、子供が生れるとすぐ頭髮をツルリ剃り落す習慣があるが、之れも兒童の腦の保護の上に宜しくないことである、

次に人間の發育の經路を見ると、常に充實と伸張とが、律動的に、交互に變化して行くことが見られるのである。卽ち、乳兒期は第一充實期で、主として內容的に充實し、整頓して行く時期である。幼兒期は第一伸張期で、重に骨格や身長の伸びて行く時期になつて居る。少年期は其前半が第二充實期

に當り、後半が第二伸張期に當り、青年期に入つて始めて一人前の人間が出來上ると云ふことになり、此時代を定型期と謂つて居る。斯樣に充實と伸張とが、交々に進んで行く事を律動的變化と謂ふのであつて、此現象を根據として、少年期を定めることが一番妥當だ思ふのである。

それから是れは前章でも一寸述べて置いた事であるが、胚種は外胎葉、中胎葉、內胎葉と云ふ三つの部分から出來て居るが、其胎葉の變化に就て謂へば、乳兒期及び幼兒期は、消化器系統の特に發達する時期であり、少年期と青年期は專ら筋肉系統の發達する時期である。

斯くの如く乳兒期及び幼兒期に於ては、消化系統が非常な勢を以て發達して來る結果、食物を消化する力が非常に強い。それで、此時期には食物を嚥下すると間もなく、殆と衝動的に空腹を感ずるので、此時期には、一番消化器病で斃れる者が多いのである。

要之、吾々の最も注意しなければならぬ點は、心身の發育の調和を保つて行くと云ふことである。若し心身の發達の均齊が破れ、その調和がとれない場合には、そこに屹度一つの恐るべき缺陷が發生する。

不良少年には、必ず其身體の發育上に、均衡を失つして居る點を發見する。例へば、特に足が目立つて大きかつたり、手が長かつたり、右の眼と左の眼の大きさか違つて居つたり、身體の發育に調和がとれてゐないものが多い。

子供の發達が、本當に調和がとれて居るか居ないかと云ふことを、實驗する簡單な方法は、奇麗に乾いた橡側の上を、足の裏に水の附いた儘、子供に歩かせて見る。そうして子供の足跡が若し同じ間隔になつて居れば、全身の發達が略々調和して居ると見る事が出來る。然し、大概四五歩の間は同じ間隔で進むが、其から先きは自然に長短を生じ易いもので、若し其間隔に甚しい不均等があつたら、全身の發育が不調和のものと見る事が出來るのである。

私が大正八年に小田原の少年監獄で調査した所に據ると、在監者百十名の中で、體格の丙に屬するものが八十八名、乙に屬するものが三十名、甲の部類に這入るものは一人もなかつた。斯う云ふ風に、不良少年には、身體の發育上に右のような缺陷があると云ふことは、注意すべきことで、子供を敎養する上に於て、身體の發達の調和を維持して行くと云ふことには、吾々の最も深き注意を拂はねばならぬ事である。之または後天的な疾病

次に遺傳に就ては、後に出來得る丈け詳細に論述する考で、爰には簡單に止めるが、よく低能兒だとか、或は痴呆性だとか、さう云ふやうなものは、祖先の神經系統の障害の遺傳に出づることが多い。遺傳には隔世遺傳と近接遺傳とがある。隔世遺傳と云ふのは、吾々には誰れでも野蠻な動物性が有る、それは吾々が人間に進化する以前に經過した動物性の遺傳が現はれて來るのである。之に反し、近接遺傳と云ふのは、吾々に近接した祖先の精神系統の缺陷が、直接に表はれて來る場合を言ふのである。

近接遺傳の例として、よく學者の引用することであるが、千七百年頃和蘭に生れ後に亞米利加に移住したマックスと云ふ男は大酒飲みの大惡漢で、彼の妻も亦、破廉恥な淫奔な女であつた。此二人が米國に移住して以來、其子孫がジユウク族として殘つて居るが、ジユウク族の千二百名に就いて調査した處が、乞食をやつた者が三百十名、殺人を犯した者が七名、竊盜を犯した者が六十名、其他の犯罪を犯した者が百三十名、夭死者が三百名其外生理的缺陷たある者が四百名辛じて正業に就いた者が僅かに二十名しかないと云ふことである。

又之と反對に、マックスと同じ頃英國にジョナッサン、エドワードと云ふ人が有つたが、此人は極めて高德な學者で、さうして信仰の强い敎者であつた。其人の子孫の千四百人に就て調査した處に據ると、大學を卒業した者

が百二十名、大學總長になつた人が十三名、大學教授になつた人が百名、自ら學校を創立した人が十名餘あると云ふことである。

遺傳の中で最も恨るべきものは、前にも述べた樣に、結核、梅毒及び酒毒の遺傳である。就中酒毒の遺傳は健康な體を有つて居る祖先から生れた子供の中にも屢々發見する所で、此點は最も吾々の注意しなければならぬことと思ふ。此點に就ての富士川博士の說は前にも述べた通りで、低能兒や不良少年の多くは、大酒飲みの父を持つて居るのである。

哺乳上の注意

次に吾々の考へなければならぬことは、乳兒に對する哺乳上の注意である。之れは吾々の家庭に於てもよく經驗する所であるが、子供が泣き出すたんびに母乳を與へる習慣がある樣である。俗に泣く兒に乳といふ風に、之れは當然な事の樣に思つて居るが、大變よくないことである。

子供の泣聲を研究した或る學者の說によると、倦怠から來る泣聲、空腹から來る泣聲及び疼痛から來る泣聲と三つの種類があると謂つて居る。卽ち疼痛から來る泣聲は最も急激で、倦怠から來る泣聲は最も緩漫である。であるから泣聲を辨別せずに、只泣きさへすれば乳を與へるといふことは、或意味に於て、慘酷な取扱ひと謂はなければならない。卽ち生理的に謂ふならば消化機能を害する結果になる。昔から良く疳の蟲と云ふことを謂ふが、疳の强いことは、多くは消化機能に障害のあるためである。又之を心理的に謂ふならば、極めて自墮落な習慣を不知不識の間に養成することになるのである。

前章で、乳兒期幼兒期少年期はいづれも人間の準備時代であつて、規律的訓練を與へることが、一番肝要であると云ふことを述べたが、此規律的訓練と云ふことが、間斷なく哺乳せしめると云ふ習慣に依つて破られるのである。

生理學者の說に依れば、生後二三ヶ月迄は二時間置き位に飮ませ、二三ヶ月後は三時間置き、稍長じて五六ヶ月後は四時間位の間隔をおくことが必要

であり、夜間は努めて哺乳を避け、止むを得ない場合でも三回以上哺乳させてはならぬ。而かも其回數は順次減らして行くことが衛生上及び訓練上最も必要なことであると云ふのである。

兒守の選擇

次に、乳兒期中に、特に注意を要することは、兒守の選擇である。吾々が取扱つた不良少年の中で、どうかすると、立派な家庭に生育した者を見出すことがある。奈何してあんな家庭から、こんな少年が生れたか合點の行かぬことがあるが、其原因をよく調べて見ると、幼年時代に、餘り宜敷くない兒守の手で育てられたことを發見する場合が尠くない。

幼年、少年期に於ては、非常に感受性が強いため、如何なる刺戟に遭つてもすぐに之に感應するのが普通になつて居る。さう云ふ時代に、日常接觸して居る兒守の惡るい習慣が、不知不識の間に兒童の頭に染込んで、惡い習慣がつくと云ふことは免れない事である。

乳母車の弊害

序に述べて置くが、乳母車の使用は少くとも、生後七ヶ月を經過した上でなければならない。其以前に乳兒を乳母車に乘せて、遊はせると云ふことは、子供の頭に惡るい影響を與へる。殊に、人込みの中を乳母車で押し分けて行くことは、最も良くない。其は、穢ない空氣や塵芥を呼吸するからである。私は成るべく幼兒期には乳母車の樣なものを使用しない方が宜いと思ふのである。

第二　幼兒期の生理狀態

(一)　幼兒期の特徴

幼兒期に於ける最も著るしき特徴は、身體の運動が非常に盛んになつて來ることである。それは、全身の運動に伴つて、腦髓の發達を促進し、筋肉竹格の均齊を取つて行かなければならぬ本能から來るのである。

此時代に於ては、一寸散歩に連れても、おとなしく眞直に歩こうとはせず、

或は右に寄り左に折れ少しでも高い處があれば躍け登る、低い所があれば飛び降る、一寸でもぢつとして居る様な事はない。斯の如く間斷なく活動すると云ふことが、卽ち一種の本能的運動で、此運動が充分に行はれなければ、どうしても、身體の發育の均正を保つことが出來ない。調和を維持することが出來ない事は、既に前章で述べた處である。

吾々の體でも、仔細に之を調べて見たならば、完全に均正を保つて居るものは少ない。右の眼が大きいとか、左の耳が小さいとか、多少の差は免れぬのである。さう云ふ生理的發達の相異の著しい者に、多く不良性の人物を發見するのである。

犯罪定型

伊太利のセザーレ、ロンブロゾー（Cesare Lombroso）と云ふ人は、刑法學者であると同時に法醫學者であるが、此人は天性の犯罪人（Deliquente nato）と謂ふ者があることを立論して、其骨格、容貌、體質等に犯罪人獨特の一種の型（Tipe Criminale）があると云ふことを說明して居る。晩近所謂伊利學派に續いて獨乙學派といふものが起り、今日刑法學上一大勢力を有して居る主觀說なるものは、實にロンブロゾーの學說から生れたものだと謂ふてもよいのである。

遊戲

由來子供は遊戲に非常な親みを持つ者で、遊戲を離れて子供は考へられない。此兩者には實に離るべからざる關係があるのである。

抑々遊戲の生命は何處にあるかと云ふと、興味と自由の二つの點にある。子供が遊んで居る間に、いろんな變化がある。其變化に伴ふ所の刺戟が、彼等の興味を呼起す一つの原因で、常に間斷なく多くの刺戟に遭遇すると云ふことが、兒童發育上最も必要な事である。

吾々の身體の中でも、手を多く使ふ者は他の部分よりも手が發達する。腦を多く使ふ者は腦がより善く發達する、斯う云ふ意味に於て、子供が遊戲に

興味を持つのは、一つの尊い本能だと謂ふてよいのである。

遊戯は又自由を生命とする。若し之れが一定の制限せられた狹き苦るしい部屋の中であるとか、或は體を縛つて遊ばせるとか云ふ樣なことでは、少しも其處に遊戯の生命と云ふものはない。

一體、人間は誰でも現在の境遇には、滿足の出來ないものである。赤ん坊がやう〳〵這ひ出す時、部屋の眞ん中に置くと、何處と云ふ目當もなく、目的もなく、左右に這ひ廻るのは面白い現象であるが、是れは何人でも現在の境遇には滿足が出來ない、どこかにもつと明るい、樂しい、伸んびりした希望の場所があるやうに、常に感ずる人間の本性に出づるものである。

少年が始終同じ場所で同じ遊戯を繰返すことを嫌ふのは其爲めである。だから、無理に家の中で遊べとか、外で遊ぶなとか、外で遊んで家に這入るなとかいふ樣な制限を加へて、子供に遊戯をなさしめるといふ事は、遊戯の本

來の精神を沒却したものである。

遊戯は飽迄も自由でなければならない。興味本位でなければならない。自由のない、興味のない遊戯は全然無價値である。

少年の遊戯は、吾々の眼から見て詰らないことであつても、少年のために は、將來大事業をなす基礎である。こう考へて見ると、なか〳〵少年の遊戯は忽かせには出來ない。無論危險な運動であるとか、或は射倖性や、殘忍性を挑發するやうな遊戯は、之を避けなければならぬが、成るべく少年の遊戯には、自由と變化を與へるやうに力めて行くことが必要である。

運動に關聯して考ふべきことは、少年の食事である。就中勉學と運動との關係である。元來人間の體は、總ての部分が同じやうに發達して行くものではない。或る部分の發達が非常に旺んである場合には、他の部分の發達の程度は著しく緩やかになつて來るのが原則である。少年が讀書や算術を勉強し

て居る間は、血液の大部分は腦に上つて來る。食事の時は全身の血液が大部分胃の周圍に集中する。それから盛んに運動でもする時には、血液が多く四肢に集中する。斯う云ふ關係になつて居る。だから、例へば屋外で猛烈に運動して居る子供を、家の中に呼び入れて、休息の暇も與へず食事を取らせるとすぐに消化不良に陷る。其は四肢に活動して居る血液を、急に胃の周圍に集中させることが出來なくなるからである。

入浴

殊に、最も注意を要することは、入浴と食事との關係である。卽ち食事と入浴との間に適當の間隔が無い場合は、胃の周圍に集中して居た血液が、急に全身に亘つて激烈に循環し始める結果前と同じ樣に、消化不良症を起すのである。だから、食事であるとか、勉學であるとか、運動であるとか云ふものゝ間には、常に相當の間隔を必要とするのである。

小學校で體操の時間を大概午前九時から十一時迄の間か、或は午後一時から三時迄の間にやるのは其が爲めで、少くとも食事の一時間前後は、成るべく安靜の位置に置くと云ふことが、兒童の發育上最も大切なことである。よく子供は食事が濟めば箸を投げ棄てゝ、直ぐに戶外に飛出して行くといふことがあるが、之れは絶對に止めなければならぬ。一番宜いのは食事の濟んだ後には、餘り頭を刺戟しない樣な面白い昔噺でもすると云ふ習慣をつけることで、晩餐後に家族が食卓を圍んでいろんな世間話をすると云ふことは、單に一家團欒の上から美しいことであるのみならず、少年衛生上からも極めて大切なことであると思ふ。

鼻液

次に幼兒期には誰でも鼻液を多く分泌する傾向がある。殊に日本人は他の民族に比して一層著しい樣である。之れはどう云ふ原因から來るものであるか、今日迄の研究では、未だ十分な原因が發見されて居らぬ。或は家屋の構造の缺陷から來るのか、或は食物や衣服の關係から來るのか、それ共、日本

人の體質が然らしむるのか、之れは徐程研究を要する問題である。

鼻液の色は初めは無色であるが、次第に白色を帶び、後に黑色を呈して來る。尤も黑く見へるのは、塵や埃が附くためもあるが、病的に鼻汁の出るのは、大概輕い感冒が其原因を爲して居る。冷たい空氣が鼻腔の粘膜を刺激し所謂鼻加答兒と云ふものになる。鼻加答兒の初期の鼻液は殆ど無色に近いが段々昂進して慢性になれば、漸次其分量を增加すると同時に、そこに一種の色彩を帶びて來るが、之れがために鼻神經が著るしく阻害されるのみならず、最も直接の關係を有つて居る神經中樞に非常な障害を來し、其結果低能兒になると云ふやうな實例は幾らもある。

私は先年巢鴨の精神病院で、低能兒の中に鼻加答兒から昂進したものと思はれるのが非常に多いと云ふことを聞き、今更乍ら鼻と腦との間には非常に密切な關係の有ることを感じたのである。

次に吾々が此時代に於て、兒童の發育上に注意しなければならぬことは、耳の疾患である。耳聽は出產の際に耳の中に這入つた汚水が、原因をなす場合が多い。若し適當な時期に醫療を怠れば、中耳炎になり、腦の中樞を犯し其が爲めに非常に腦髓の發達を阻害するのである。

それから最う一つは齲齒である。乳兒期は乳齒が脫落して永久齒が代る時期である。此時期に於て最も注意しなければならぬことは齒の衞生である。之れは獨乙にあつたことであるが、或る不良少年が甚しい齲齒に罹つて居つたので、齒科醫の治療を受けた所が、不思議に其頑固な不良性が癒つたといふことである。そこで段々研究して見ると、齲齒から出る毒素が、食物と共に嚥下され、その毒液が身體の血管に吸收されて、腦神經を刺戟せられたものであるといふことが判つたと云ふことである。して見ると、齲齒の爲めに、それが原因になつて、精神薄弱者、知能低格者となる者も多數の中には少く

あるまいと思ふ。それ等の關係から見ても、幼兒期に於ては、齒の衛生と云ふことは、餘程注意しなければならぬ事であると思ふ。

それから、最後に、食事の際に、ものをよく嚙むと云ふ習慣を子供に與へることが必要である。それは消化作用を助ける上に於て、極めて肝要なことである。

病後の取扱

序に病後の取扱ひに就て、少しく述べて見ようと思ふ。子供は一般に抵抗力が弱いために、病氣に侵され易い。七つの祝と言つて、七歳位まで無事に通過すれば、先づ〳〵と云つて安心して宜い位になつて居るが、四五歳の間が一番消化器に故障の多い時期である。

子供の病氣程親の心配なものはないが、こんな時には得て子供を甘やかす傾向がある。特に身體の虚弱な子供程、平素でも甘やかす傾向があるが、之れは大變宜しくないことである。

私共が不良少年の原因を調べて見ると、生來體質が虚弱だつたと云ふことが、其原因をなして居るのを發見する場合が多い。よく總領の甚六と謂ふが、始めて子供を設けた時の嬉しさは誰にも變りはない。よい年をして馬にもなれば、犬の眞似もする。まして育兒に經驗のない、家父又は主婦としての資格に乏しい者の所謂無智の愛は、徒らに子供の我儘な、放縱な性質を助長せしめ、自ら求めて不良少年を作上げる場合が多いのである。

殊に多數の子女を持つ親が、其一人の病兒の看護に沒頭して、他の子女を顧みるの暇がない場合には、知らず識らず偏愛に傾き易いが、之れは他の子女に對して、非常に惡い印象を與へるものであるから、さう云ふ點も大いに注意しなければならぬ。

(二) 都會の兒童と田舍の兒童

最後に、都會の兒童と田舍の兒童との關係に就いて、一言しておき度いと

思ふ。

一般に都會の兒童は、田舍の兒童よりも理智に長けて居るやうであるが、其半面に、稍道義觀念に缺けて居る所がありはしないかと考へられるのである。

都會の兒童が理智に富んで居ると云ふことは、經濟上の壓迫が、少年の理智性に大なる刺戟を與へる結果で、道義觀念に乏しいのは田園生活者の如く、常に大自然に親み、之に倣て善良なる感化を受ける機會が尠ない結果であると思ふ。

自然程吾々に大なる感化を與へるものはない。詩人ウォーズウォースは其詩の中に、大自然は人生の最大の敎訓であると云ふことを歌つて居る。可弱い一本の草花にも、そこに大自然の美妙が表はれて居る。春に花が咲き、秋に實を結ぶ、此大自然の秩序ある一糸紊れざる現象は、不知不識の間に少年に尊い敎訓を與へるのである。自然は人生の母である。吾々は此大自然に包容せられ、大自然を友として生を送るのであつて。「自然」は人生の搖籃であり、又墳墓である。自然を離れては人生を考へられないのである。

或る人の書いたものに斯う云ふことがある。河に臨んだ巖の間から、一本の麥の芽が吹き出して居る。そしてそれが實を結んで岩角に立つて居る樣子は、恰度死に臨んで動かざる勇士の面影がある。輕風一過其實は河中に吹き落されてしまふべき目前に迫つた而して到底遁るゝ事の出來ない當然の運命にも無關心に、只自分に與へられたる天職を眞面目に遂行して行く男子の面影が見えると言ふて居るが之れは實に至言であると思ふ。人間はよく自分の境遇に不平を抱き、煩悶を重ね、或は世を儚み人を恨むと云ふことは、吾々お互の免れざる處であるが、此一本の麥が、自分に與へられた天職のために、差し迫つた死の前にあることをも忘れて、泰然自若として、自分の義務

を遂行して行くのを見ては、只吾々は大自然の前にひれ伏すより外はないのである。

田舎の少年は生れながらにして、此靈妙なる大自然に接して居る。遊ぶに山あり、河あり、野あり、海あり、實に大自然の感化とでも言ふか、不知不識の間に、人生の運命や秩序や道義と云ふものを會得することが出來るのである。之れに反して、都會の兒童には、御承知の通り、殆ど遊び場所もない。一寸子供が外出しても、電車が走る、自働車が飛ぶと云ふ風に、迂濶すれば轢き殺されて仕舞ふ。實に戰々競々である。右顧左眄、進むにも退くにも、其心勞は實に容易なものではない、自働車のラッパ、電車の音響、此等は腦髓の未だ充分に發達して居ない幼兒に對して、非常に惡るい影響を與へるのである。

之れはよく何人も思ひ當る事だらうと思ふが、不良少年の一番多く出る所は、東京では何と謂つても、本所深川淺草邊である。棟割長屋とでも言ふか、狹ま苦るしい一間しかないと云ふ樣な家が軒を連ねて、遊ぶ場所もない環境に生れた少年に多い。彼等は僅か一間か二間四方位しかない路地の空地に集つて遊んで居るが、到底そんな場所で、本當の大自然に接することは、夢にも出來ないことである。少年の生命とも謂ふべき遊戲の場所すら見出すことの出來ないと云ふ都會の兒童は、眞に憫れむべきものである。

茲に於てか、外國では都會兒童保護事業と云ふものが行はれて居る。殊に亞米利加などには、盛んに識者の間に、唱導されて居るのである。卽ち兒童の爲めに、出來る丈け多くの公園を設置するとか、或は林間學校と言つて、夏季になれば、都會の生徒を山の中へ連れて行つて、涼しい林の中に於て美くしい大自然を友として、其中に、敎育をして行くと云ふことが行はれて居る。

斯う云ふ關係から考へても、幼兒を出來る丈け田園に於て成育せしむることが、精神的にも生理的にも誠に望ましい事で、幼兒の都會生活は餘程考慮を要する問題であると思ふ。

都の花に憧がれ、我れから美しい田園生活を棄てゝ都會に走る少年が、嬲てみすぼらしい姿で都を彷ふ不逞の群れに投ずることは、誠に悲しむべきことである。

第三　少年期の生理狀態

(一)　骨格筋肉の發達

少年の生理狀態の中で最も著るしく現はれる特徴の一つは、骨格筋肉の發達である。之れは多少人種に依つて其發達の程度を異にして居るが、大體に於て、骨格筋肉の發達は十六七歳で稍々完成するのが普通である。

(二)　消化機能の發達

他の一つの特色は、消化機能の發達することである。吾々も覺へがあるが、少年は隨分大食である。食物の分量から言へば、あまり大人と大差がない。それは消化機能の發達に依り、新陳代謝が旺んに行はれる結果である。從つて、此間によく起る現象は、間食である。間食に就ては、少年の不良性を說明する際に詳述する積りであるから、爰には之を省略する。

由來間食は少年に對して、惡るい性癖の原因を與へるものである。東京邊ではお八つとかお三時と言つて居るが、何れの地方でも少年に間食は附き物になつて居る。間食が段々進んで行くと、買喰ひとなり、買喰ひから金錢の興味が起つて來る。始めは金錢の魔術的効力に畏怖して居た者も、金さへ出せばどんなものでも欲して得られさるものはないと云ふ一種の好奇心から、金錢に愛着し趣味を持つやうになる。母親から貰ふ美味しい菓子よりも、一錢二錢の駄菓子を買つて食べる方が面白くなつて來ると、爰に最も怖るべき

浮浪性や浪費性が芽へ出づるのである。

間食を與へる時間に就て、嚴格な習慣を持たない家庭では、若し家族が外出でもして、子供一人留守をして居ると云ふような場合には、ツイ菓子を盜み出すことを覺へ、之れが嬲て金錢を盜むと云ふ最も怖るべき性癖に變はつて行くのである。

盜癖にはいろ〳〵の原因もあるが、私の見る所では、間食から來る場合が多いやうに思ふ。

然し間食は前にも述べた通り、少年の生理上から、どうしても避け難いことであるから、其惡癖を避くる爲めには、先づ時間を定めることゝ、間食物を選擇することが必要である。自分の家庭で十分な間食物を與へられない子供は、他所に遊びに出て人の持つて居るものを橫取りする。そんなことが一種の動機になつて、終には取返しのつかぬ不良少年になる場合が多いのである。

だから昔の人はよく考へたもので、お八つとかお三時とか一定の時間を定めて、間食を適當に與へると云ふやうな習慣を作つてゐる。之は買喰ひや盜喰の惡癖を防止する上から云つても、又子供の生理的關係から言つても、適切な注意である。只泣いたから菓子をやる、怒つたから菓子をやると云ふことは全然間食の意味を沒却したものと謂はなければならない。

少年期は又消化機能が盛んになる結果、過食の弊を伴ひ易い事は、前にも述べたが、それが爲め、一面に於て消化不良を伴ふ危險がある。此危險を避ける爲めには、第一に食事と運動との調和を取つて行くことが肝心である。之れは少年の精神敎育上から見ても、極めて大切なことである。

(三) 腦髓の發達

少年期に於ける第三の特色は、腦髓が急速度に發達して來ると云ふことである。腦髓は七八歲で大人の腦髓と同じ分量に發達する子供もあるが、十四

五歳で其發達に一つのエポックを作るのが普通である。

腦髓と云ふものは一體どんなものかと云ふと、大腦小腦、脊髓、延髓の四種になつて居る。大腦は後頭部を除いた他の全般を云ひ、左右の兩半球に分れて感覺運動及び聯合中樞をなすものである。小腦は後頭部を占め同じく左右の兩半球に分たれて居るが、一般に、生殖作用を主宰する所であると云はれて居る。脊髓は脊髓骨の中央を貫通する纖維及び神經細胞から出來て兩端が三十一對に分れて排泄作用や發汗作用及び反射運動の中樞をなしてゐる。脊髓と腦髓との間を聯絡するものが卽ち延髓で、延髓の作用は食物の嚥下、咳嗽、噴嚏、嘔吐、唾液の分泌其他反射運動の中樞をなすもので、生命に最も必須な機能である。

夜尿症

少年期に寢小便(夜尿症)の癖を持つ者が尠くないが、此原因は脊髓神經の故障に在るので、卽ち排泄作用が完全に行はれない結果である。私が取扱つた中で、此寢小便が原因になつて、非常な惡性の少年になつた者がある。此少年は十六歳になつても此癖が癒らないため、何處へ奉公しても、朋輩からは嫌はれ、主家にも居堪らず、最後に不良少年の群に投じたと云ふ憐れむべき歷史を持つて居る者であつた。尤も三四歳迄は夜尿症と見做すべきものではないが。五六歳乃至それ以上になつても、斯う云ふ癖の癒らない少年は、慥かに脊髓神經に故障のある證據で、時期を失はぬように、專門醫の治療を受ける必要がある。

次に少年期の神經作用中特筆すべきものは、感覺が非常に鋭敏になることである。感覺とは視覺、聽覺、觸覺、臭覺、味覺の五つの作用卽ち五官を謂ふので、此働きが鋭敏になる結果、感受性が非常に高まつて來るため、爰に感覺の滿足を求めんが爲めに、色々な慾望——或は運動慾であるとか、觀覽

欠

慾であるとか云ふものが起つて來るのである。

一例を擧げると、不良少年の中で往々斯う云ふ癖のあるものがある。婦人の持つて居るリボンを盜んだり、櫛を盜んだり、甚しきに至つては、腰部の卷布を盜んで喜んで居るものがある。之れは變態性慾から來るのであるが、視覺が鋭敏になるに伴い、聯想作用が旺んになる結果だとも見られるのである。言ひ豫れば、吾々が見ては感興も何も起らないものに、彼等は強き感興と執着とを持つ場合が多いのである。

子供が夢中で遊んで居るのを見てゐると、獨手に笑ひ崩れないで居られない事が多い。部屋の隅に紐でもふら下つて居れば、直ぐに電車を聯想して、自分が車掌になつた樣な氣持になる。側で見て居ては馬鹿〳〵しいことでも、本人は至つて眞似目である。少年の目からは、箒でも棒切れでも刀劍に見へる。是れは前にも述べた聯想作用が盛んになる結果に外ならない。

なものを選んだ方が宜しい。

少年の生理狀態として特に注意すべき要項は、大體以上の如き點であらうと思ふ。專門外の生理問題に就ては此位に止めて置いて以下少年心理に就て述へようと思ふ。

第五章　少年の心理

第一　嬰兒期の心理狀態

胎兒の心理狀態に就ては、既に述べた如く、今日の心理學の研究では、胎兒には果して精神作用があるか奈何かと云ふことは不明になつて居るが、只胎兒にも外部の刺戟に感應する一種の感覺があると云ふこと丈けは、否定すべからざる事實である。

胎兒の眼や耳の周圍は、一面に不透明な液體を以て覆はれて居る。勿論視

覺もなければ、聽覺もない。只僅かに皮膚に觸覺と云ふようなものがあるのではないかと思はれる丈けである。卽ち母體の下腹部を手を以て壓すれば、胎兒が動き出すと云ふことは、姙婦の經驗する處で、胎兒には外部の溫度に感應する一種の反射作用があると云ふこと丈けは顯著な事實である。

嬰兒の心理を述べる前に、遺傳に就て簡單に述べて置きたい。猿と人とは生物學上非常に近いものである。場合に依ると、殆と兩者の區別のつかないやうなものもあるのであるが、猿の子は永久に猿であつて、到底人間となることは出來ない。猿は猿だけ、人間は人間だけ、其精神量は遺傳的に自ら定つて居る。之れは猿と人許りではない。同じ人間でも、野蠻人と文明人との間には、どうしても其發達の程度の上に、自ら區別があるのは免れない。

此遺傳に經驗が加はつて、茲に一つの習慣と云ふものが出來るのである。遺傳の大切なことは、今更ら謂ふ迄もないが、心理發達の上から謂へば經驗は更に重大な關係を有つて居るのである。

而して此經驗はどう云う所から來るかと云ふと、矢張り刺戟に對する感覺から來るので、其刺戟の最も強いものが一つの記憶として存在するのである。お互は一日の中に、どんなに多くの刺戟を受けて居るか判らない、視覺、聽覺、凡有る感覺の上から見たならば、實に無數の刺戟を受け、無限の經驗を嘗めて居るに違いないが、記憶として殘るものは、其中の僅かな強い刺戟に過ぎない。此記憶が重つて爰に一つの習慣と云ふものが出來上るのである。

嬰兒期は習慣性に最も富んで居る時期である。換言すれば、人間の心理狀態が幼稚であれば幼稚である程、外界の刺戟に適應する力の強いものである。だから、赤ん坊には癖がつき易い、一旦抱き癖が付くと、一寸下に置いても、火の附いたやうに泣き出す。哺乳の上にも母親の癖がつく、そして一旦癖がついたら中々癒らない。此嬰兒期に出來る各般の習慣は、育兒上吾々の最も

注意しなければならぬ處である。

嬰兒の泣聲　又嬰兒期には未だ話しが出來ない。卽ち語能と云ふものがない。だから、嬰兒の表情は、其泣聲に依つて知るより外には途がないのである。嬰兒と云ふことを羅馬語でインファンシア(Infancia)英語でインファンシー(Infancy)と云ふが、之れは話すことが出來ないと云ふ意味である。

嬰兒の泣聲は前にも云ふ通り、唯一の表情方法であるから、嬰兒の心理を知るがためには、彼れの唯一の表情方法たる泣聲を研究しなければならぬ。或學者の說によると、嬰兒の泣聲には三つの種類がある。卽ち饑餓を訴へる場合と、退屈を訴へる場合と、疼痛を訴へる場合の三種で、退屈から來るものは泣聲が最も緩漫であり、疼痛から來るものは最も激烈であり、饑餓から來るものは其中間に位するものであると云ふことは、總て前章で述べた通りである。

嬰兒の睡眠　凡て、動物に同一の刺戟を間斷なく繰返すと、屹度睡眠を催して來るものである。吾々でもよく經驗する所であるが、汽車に乘つて永い間同じ刺戟を受けて居ると、知らず識らずの間に眠くなつて來る。此呼吸をよく採つたのが例の子守唄である。若しこれが進行曲の樣な、激烈な音調であつたら、切角眠りかけた子供でも、すぐ目を醒ましてしまうだろふ。子供唄は飽く迄音律が單調で、緩慢で、子供は自然に眠氣を催すやうに出來て居る。

母親が夜なべに針仕事でもして居る傍で、子供が火の附いた樣に泣き出すことが有る。母親はどうかして寢かさうと、針の手を休めて赤ん坊の胸のあたりを輕く叩く、さうするといつの間にか子供はすや〳〵眠つて仕舞ふ。此は吾々の家庭でも、常に經驗する處である。然し爰で注意すべきことは、母親が赤ん坊の胸を叩いて居る間は決して本當に眠つて居るのではない。間斷なく同じ速度で一定の刺戟が繰返される時、其處に非常な快感を感じる。赤

ん坊は只『もう一つ叩くだらう、もう一つ』と云ふことを斷へず本能的に願いて居るに過ぎない。然し母親の方では、子供が急に心持ち善さそうに默つて居るから、もう眠つたものと信じて手を引く、其瞬間に眠つてしまうのである。換言すれば、嬰兒がもう一つ叩くだらうと待ち設けて居る時に、もう眠つたと思ふ母親の信念が、子供に感應するのである。

或る擊劍の先生から斯う云ふ話を聞いたことがある。敵味方が左右に分れて相對峙して居る時、此方が一歩後へ退くと、先方は一歩進んで來るに違ひない。そこで又一歩退くと、先方は之を追ふて又一歩進んで來るに決まつてゐる。其瞬間第三歩を退くやうにすると先方は又一歩進んで來る殺那に、反對に此方から一歩大きく進んで一刀兩斷に打ち込む。之れは一刀流の極意になつて居るさうで、前に述べた母親が子供を寢かすと同一筆法である。所謂誘惑、轉機の方法を應用したのもである。

私は催眠術を僅かばかり研究し、自らも實驗したことがあるが、之れは矢張り誘惑と轉機の二つの方法に依つて、人を睡眠狀態に陷らしむるものである。元來人間から自我と云ふものを取去ることが出來たなら、萬人齊しきものになつてしまう。恰度二つの全く質量の均しい釣鐘を並べて、其一つを打てば他の釣鐘は打たなくとも同じ樣に鳴る。之れは物理學上共鳴作用と云ふが、催眠術も畢竟此原理を精神上に應用したに過ぎない。

吾々が若し一切の疑ひといふものを取去ることが出來たら、そうして本當に信仰に這入ることが出來たら、何人にも自分の信仰が感應せずには措かぬであらふと思ふ。

話しが聊か余談に亘つた嫌いがあるが、前にも述べた如く、凡べて同一の刺戟を反覆する時、其處に精神の弛緩を生ずるのは、何人も免れない事であるから、さう云ふ泣聲を聞いた場合には、身體の位置を更へて、新らしい刺

載を與へてやると云ふやうな方法を採ることが必要である。

嬰兒は生後的六月から匍匐の傾向か表はれ、更に四ヶ月乃至一年で直立し、それから徐ろに歩行することが出來る樣になるが、此變化は前にも一寸述べたやうに、動物進化の道程を示すものである。尤も嬰兒があまり早く歩行するのは決して褒めたことではないが、反對に生後一年二三ヶ月で、猶ほ歩行が出來ないと云ふ嬰兒は、屹度其神經中樞に障害があると見てよい。さう云ふ場合には專門醫の診察を受けるが宜い。

嬰兒の手工能力

嬰兒が歩行するようになると、今度は手を自由に運動し始めることが出來るようになる。この手が自由に動くと云ふことは、余程興味のある事柄で、此手工能力——之れは他の動物には見られない、人間獨特の機能である。動物の中では最も智能の發達して居ると言はれて居る猿でも、此手工能力と云ふことはない。人間が凡ての動物を征服し得た理由の一つは、確かに、此手工能力と云ふ勝れた獨特の能力があるからである。

如何なる野蠻國に行つても、又原始時代に遡つて見ても、苟も人類である以上は、此手工能力の見られないものはない。單に手工能力があると云ふ許りでなくして、却つて原始時代に於て驚くべき精巧な美術品が作られて居ると云ふことは、吾々が考古學に於て、屢々經驗する所である。

嬰兒の語能

又どうかすると、子供の中から右の手が充分に動かず、却つて左の手が利くやうになる者もある。此事に就て遺傳學上から色んな說も有るが、之れは別に心配するには足らない。相當の年齡に達すれば、慣習的に順次矯正して行くことが出來るが、一般に手工能力の貧弱な子供は、腦神經に故障があると見て宜い。

嬰兒の手が自由に利くやうになると、次には言語を用ゆることになる。從來言語學と云ふものがあつて、人類の言語は固より、有らゆる動物の表情さ

う云ふ方面に就ての研究が旺んになつたようであるが、今日迄の研究では言語は人間獨特の機能と見做され、他の動物の發する音聲は、一種の表情に過ぎないものと考へられて居る。

嬰兒が分娩の瞬間に發する第一聲は、肺部から排出する空氣が、聲帶に觸れて、一種の音聲を發する所謂自然の聲である。それが習慣性となつて、順次意識的に一つの音聲を發することになるのである。

嬰兒が言葉を使用する順序から謂ふと、之れを五期に分けることが出來る。先づ第一期には母音を發聲する。アイウエオ斯う云ふやうな音聲を發する。之れを原始的音聲とも謂へる。兎に角五十音中一番發聲し易い音聲である。それから第二期に於て、ママと云ふ音聲を發する。唇を輕く打てばマと云ふ音聲になり、少し強く彈けばバとなり、より強く打てばパと云ふ音聲になる。是等は第一期に發する母音に次ひで、簡單な音聲になつて居る。英語のパパー、ママーとふ發音は簡易の點から、父母の意味に用ゐたものであらふと思ふ。

次に第三期に入ると、擬似語を用ゐ始める。犬をワン〳〵と謂ひ、猫をニヤア〳〵と謂ふのは、畢竟嬰兒の直觀から來る摸倣である。此時期には又音聲を反覆させる傾向がある。ママと云ひワン〳〵と云ひニヤア〳〵と云ふやうな具合に、凡て同じ言葉を反覆する。

之れは心理學上から云ふと、單純な言葉を反覆して觀念を強めることになるのであつて、生理學上から見れば、反覆音聲は發聲し易き關係がある。卽ち反覆語を使用するのは畢竟此二つの理由に出づるものである。

次に第四期に這入れば、單音或は單句を用ゆる。例へば茶碗であるとか、お米であるとか、云ふやうな單語を用ゆることが出來る。最後に第五期に進むと、始めて、動詞を單語の間に附することが出來る。嬰兒の語能は、斯う

云ふ順序に進んで行くのである。

第二　幼兒期の心理狀態

(一)　感覺作用

幼兒期の特徴

幼兒の心理中最も顯著なる現象を擧ぐれば、先づ感覺が銳敏になることであろふ。殊に、感覺の中でも、運動感覺が著しく強烈になつて來ることである。此運動感覺に伴れて表はれる現象が卽ち疲勞である。

疲勞

疲勞——疲れると云ふことは、よく吾々に於ても經驗する所で、頭が疲れたとか、足が疲れたとか、手が疲れたとか云ふことをよく謂ふが、之れは學術的に云ふと間違つて居る。頭丈け、手丈け、足丈けが疲れるものではない。それでは、疲れると云ふことはどう云ふ意味であるかと云ふと、血液の中に乳酸であるとか燐酸加里であるとか云ふ一種の毒素が發生する結果、腦神經の中樞に一種の障害が起る現象を謂ふのである。

或心理學者の說に依れば、此實驗方法として一匹の犬を終日連れ廻り、へト〳〵に疲らして置き、他の一匹の犬は木柵に繫いだ儘極めて安靜な位置を保たして置く、さうして、其二匹の犬を較べて見ると、一方は大變疲れて居るが、一方は元氣旺盛で少しも疲勞など云ふことはない。そこで疲勞した犬の血液を採つて元氣な犬の血管に注射する。さうすると、今迄元氣旺んな犬が急に頭を項垂れ舌を出し呼吸を早めて、へト〳〵になつた前の犬と同じやうに疲勞の狀態になると云ふことである。して見ると、疲勞と云ふことは全く血液中に一種の毒素を發生して、それが神經の中樞を障害する結果であることが判る。頭丈けが、手丈けが或は足丈けが疲れるといふ事は、絕對に有り得ない事である。

少し餘談に亘るやうであるが、吾々が過度の勉强をすると、大變疲勞を感ずる。身體の緊張味が不知不識の間に薄らいで來る。是は誰でも經驗する處

であるが、心理學者のヘーカと云ふ人の説によると、勉強で疲れる唯一の原因は一室内に閉籠つて悪い空氣を吸ふからであると云ふことである。或はさうかも知れない。只勉強して頭を使つたから疲れると單純に考へて居るが、さうはでなくして、身體を動かさずに悪るい空氣を密室で呼吸すると云ふことが、一種の疲勞狀態を促進するものであると云ふことである。

疲勞に伴ひ、心理上いろんな現象が起つて來るが、英國の心理學者でワルナーと云ふ人が、ロンドンの一小學校を參觀して、千人に近い生徒に手を擧げさせて見た所が、眞直ぐに擧げ得たものは極めて小數であつた。此現象を見たワルナー氏は、之れには何か原因があるのだらうと色々調べて見た結果、其前日試驗があつた爲めに、生徒が疲勞して居た爲めであると云ふことが判つた。

又よく吾々の經驗する所であるが、つい先程迄遊びに夢中になつて居た子供が、何時の間にかすや〳〵眠つて仕舞ふと云ふことがある。之れは子供には疲勞の現象が極めて急速に表はれる結果である。

或る刑事學者の説に依ると、凡べての犯罪は疲勞の結果であると云ふことである。亞米利加の都市に於ける犯罪統計に依ると、犯罪の行はれる日は多く土曜日の晩である。之れも矢張り疲勞の結果であると云つて居る。又人間の死亡する時期は、大概午前三時か四時に決まつてゐる樣であるが、此時間が一番に人間の疲勞の極度に達する時であると云ふことを云つて居るのである。

此疲勞をどう云ふ風に癒やして行くかといふことは、餘程面白い問題で、音樂などは最も勝れた方法の一つであると思ふ。我々は無意識で居るが、全身の血行中には自から一つの調子がある。音樂は此調子を支配する力を有つて居る。だから音樂に依つて血液の運行の調和を取つて行き、さうして疲勞

を癒やすことが出來るのである。幼年期には自然に音樂を好むやうになるが、之れは抵抗力の少くない疲勞の感じ易い幼年時代の疲勞を癒やして行くための本能的作用である。之れを要するに幼年時代に於ては感覺が非常に鋭敏になつて來ると云ふことが一つの特徴である。

(二) 感情作用

次に擧くべき現象は、感情が非常に强烈になつて行くことである。所謂喜怒哀樂の感情が、極めて猛烈に、極めて露骨に表はれるのである。詰らないことに喜んで見たり、怒つて見たり、今迄シク〳〵泣いて居たかと思ふと急に笑ひ出す、そうかと思ふとプン〳〵怒り散らしてゐた者が忘れたやうに笑ひ崩れる、こんな現象はよく吾々が見る處で、凡て此時期は感情が强烈であると共に又變化に富んで居る。

吾々の感情は稍々智能的であり、理論的であり、經驗的であるが、少年時代の感情は極めて機械的であり、一時的であり、其喜怒哀樂には相當の理由が缺けて居る場合が多い。又感情が一方に强烈である處から、自然其行動が

破壞本能

破壞的傾向になり易い、此破壞性といふものは誰にもある一種の遺傳的本能で、建設本能と併行して進むものであるが、少年は建設本能よりも破壞本能が より强烈である。よく吾々が經驗することであるが、少年に玩具を與へると非常に喜ぶが、之れはホンの束の間で、直ぐに其玩具を壞して仕舞ふ。貰つた時に喜んだ位なら、永く大切にしさうなものであるが、そうは行かない。之れは少年から新しい所有者としての誇りが時間的に消へ行く時、そこに破壞本能がムラ〳〵と頭を持上げる結果である。

殘忍性

それからもう一つ少年に見逃すべからざる點は殘忍性である。此時代には蜻蛉の尻尾を拂き取つたり、蛙の皮を剝いだり、蟻の行列を踏み潰したり、隨分亂暴な事をして喜んでゐる。我々も少年時代を回顧すると、こんな記憶が浮

んで來るのであるが、之は後に述べる通り優勝慾が旺んになる結果である。俗にお山の大將我一人といふ風な一種の支配本能が強い結果で、吾々は常に凡てのものを支配して見やう、征服して見やう、自分が優勝者として、權力者としての誇りを得やうと云ふ考を遺傳的に持つて居る。幼年時代は此優勝慾が最も强烈な時期で、一面に殘忍性が最も露骨に表はれて來るのである。

(三) 衝動作用

次に擧ぐべき特徴は衝動が旺んになることである。此衝動と云ふのは、刺戟に對する一種の反射運動である。衝動の説明に先ち、潜在意識と云ふことに就て少し述べなければならぬ。

抑も潜在意識(福來博士は潜在精神と云ふ言葉を用ひて居られる)、とはどう云ふものであるか、之れに就て近世心理學の泰斗とも謂ふべき亞米利加のウイリヤム・ゼームス博士は「心の流れ」と云ふことを言つて居る。河を勢よく流れる水にも、表面を流れる水と底深く流れる水とある。底深く流れる水は、常に底深く流れる傾向があり、表面を流れる水は、常に表面を流れる傾向があつて、吾々の心にも一つの傾向があつて、表面を流れて居る心と、底深く流れて居る心がある。

然し底深く流れる水もどうかした柏子に表面に浮き上がることがあり、表面を流れて居る水もどうかする機會に底深く沈んで行く樣に、吾々の心の働きも或る刺戟に依つて、底深く流れて居た意識の流れが、急に表面に浮ぶことがあり、反對に表面を流れて居た心の流れが、何時とはなしに底深く沈んで仕舞ふことがある。此心の流れが或る刺戟のために、偶々表面に浮み出る場合が卽ち潜在意識の働きだといふのである。

或る家庭にこんな實話がある。生れ落ちてから間もなく老人の許で養はれた子供が四歲の時に其兩親の手に歸つた。或日子供が庭先で遊んで居るのを

見ると、其が不思議にも「踊」の型になつて居る。而かも餘り上品でないカッポレの踊に髣髴して居る。兩親は餘りの滑稽さに腹を抱へたが、よく調べて見ると、其子供が生れて間もない時に、子守りに負はれて殆んど毎日の樣に近所の踊りの師匠の家の窓から見物して居たことが判つた。まだ手も足も動かぬ時期に記憶して居たものが、偶々手足が動くやうになつた時、其時迄底深く沈んで居た心の流れが、或刺戟に依つて急に浮び上つたので、之が前に述べた潛在意識の働きである。

英國に有名なヘレンケラーと云ふ音樂家がある。此婦人は二歳の時に視覺と聽能とを同時に失つて仕舞つた人である。其後幾歳かの時に、或人がピアノに合せて子守唄を歌つて居ると、傍に居たヘレンケラーは固より何物も見へる筈もなく、又聞ゆる筈もないのに拘らず、急に嬉々として踊り出したと云ふことである。それは未だ耳の働きのある頃に經驗した一つの潛在意識が、或刺戟のために、急に表面に浮んで來たのである。此婦人は觸覺が非常に勝れて居た爲めに容易く其刺戟を受入ることが出來たのである。抑も皮膚の感覺は冷覺、温覺、壓覺、痛覺の四種類に分たれて居るが、或學者の說に依れば此等の凡べての感覺が皮膚の何れの場所にも普遍的に分布されて居るものではなくして、皮膚の中にも全然感覺のない所があると云ふことである。

潛在意識に就ては色々面白い話がある。之れは最近佛蘭西の出來事であるが、或る一人の婦人が汽車で幾つかの隧道を過ぎた時に、どうしたものか急に身體に異狀を感じたので、早速最寄りの停車場に下車して醫師に診察を受けた所が、醫師は貴女は數時間前に强姦された形跡があると言つた。婦人は考へて見る迄もなく、姦淫は愚か强姦された覺えは毛頭無いので、憤慨の餘り名譽毀損の訴を提起した。公判の日、件の醫師は當時の所見を詳述し、醫學上からどうしても數時間前に强姦されたものに違ひないことを說明したの

であるが、證人として法廷に呼出された件の婦人は、飽迄さう云ふ事實はない、絶對に左樣な記憶がないと繰返して證言した。この時裁判長は或るドクトルに鑑定を命じ、ドクトルは裁判長の許可を得て婦人に催眠術をかけた。今迄體を震はして強辯して居た婦人が、見る間に恍惚として催眠狀態に陷ゐつて仕舞つた。やがてドクトルは彼の婦人に向つて一つの暗示を與へた。さうして裁判長は婦人に訊問し始めた。すると不思議にも、件の婦人は何番目の隧道にさしかゝつた時に、丁度自分と向ひ合つて居た一人の男子が自分に催眠術を掛けて姦淫した。其時の狀態は斯くかくであつたと云ふことを裁判官の前に身振り足振りで逐一陳述した。裁判官は更に其男はどう云ふ人相の者で何處で下車したかと云ふことを尋ねると、直ぐ彼の婦人は其男子の人相着衣年齡等から果ては下車した驛名まで頗る詳細にすら〳〵と答へた。立會の檢事は此婦人の證言を根據として、犯人の搜査に努めた結果、日ならずしてその犯人を逮捕することが出來たといふ事である。

是等は明かに婦人の潛在意識が睡眠中に働いたもので、催眠術と云ふものは畢竟潛在意識を働かしめる作用であると謂ふ事が出來るのである。

此潛在意識のことを、或人は靈性だとか或は靈妙性だとか言ふ名稱を附して居るが、吾々の體に果して靈妙性とか神樣とか佛樣とか云ふべきものが別にあるかないかは別問題としても、常に吾々の心の底に沈んで居る心の働きが、或る機會に或る刺戟に依つて、忽ち表面に浮び出でて、一つの運動を起することは、否定すべからざる事實であると思ふ。

幼年期に於ける潛在意識の衝動は、非常に錯雜して居るのが常で、甚しきに至つては、睡眠中の或意識が、覺醒後にも尙ほ繼續する場合があるのである。子供が晝寢から眼を醒すや、突然頓狂な聲で、お菓子はどうしたなどと叫ぶ場合があるが、之れは枕元に菓子のあつた夢を見た潛在意識が、覺醒後

にも僅かな刺戟に依つて衝動を起すのである。

こう云ふ風に潜在意識に依る衝動が盛んになると云ふ現象は、一面に於て幼年時代に如何に宗教々育の必要があるかと云ふことを、吾々に暗示するものである。

兒童心理に就て深い研究をした學者は、我國にも相當にあるが、兒童の宗教々育問題に就て論じて居る人は殆どないと謂つても宜い位である。私は之れは日本に於ける兒童學研究の一つの缺陷であると思ふ。

どうしても兒童心理を研究する上に於ては、兒童の潜在意識を研究することが大切であり、此潜在意識を研究した者は何人でも、兒童に對して如何に宗教々育の必要であるかを痛感しない者は無いと思ふのである。

斯の如く心の底に潜在した幼さい時の經驗が、幾年かの後偶然の機會に、衝動的に心の表面に浮び出るのであるから、ウイリアム博士の如きは、人間の行爲の全部は幼年時代の習慣の發露であるとさへ謂つて居る位である。

此點から考へても幼年時代の教育とか感化とか謂ふことが、如何に重大な關係を持つて居るかゞ判る。幼年時代の教育や感化は、此意味から、全生涯を支配すると謂つても敢て過言ではないと思ふ。だから醜くい卑しい家庭に成育した兒童は、其當時は全然無感化に過ぎ去つて來ても、其が成長の後に如何なる機會に、突然不良性として表はれる場合が無いとは謂はれない。同じやうに、幼年時代に於て美くしい高潔な家庭に育ち殊に嚴かな宗教々育を與へられた者は、其當時には殆ど無關心に過ぎ去つて來ても、其時代に與へられた刺戟は、將來何れの時にか表はれて、其人の人格を支配することになるのである。だから、幼年時代の教育、殊に精神的教育、更らに進んでは宗教的信仰、さう云ふものを與へて行くことが、將來人格を大成する上に於て、極めて大切なことと謂はねばならない。

以上は幼年の心理狀態中、最も著しき現象の二、三を擧げたのであるが、最後にもう一つ注意すべきことは、此時代になると自我觀念が非常に强烈になつて來ることである。

自我觀念

之れは前に述べた支配本能に關聯して居るのであるが、此時代は非常に我儘である。一口に言へば、自分の意思をどこ迄も貫かうと云ふ傾向がある。之れは適當に矯正して行かなければ、將來怖るべき不良性を釀成することがある。お菓子をさう澤山食べてはお腹に惡いからお止しと言はれても、一度菓子と云ふ言葉を口にした以上、甘そうな菓子がもう目の前にちらつく樣になる。是は兒童の想像觀念から來るのであるが、モーこうなつては、どんなに窘なめても、耳には這入らない。終にはブン〳〵怒り出すか、メソ〳〵泣き出して仕舞ふ。そこで到々惡いとは知り乍らも、子供の要求に應ずるより外に途がない樣になるのである。

然し斯ういふ事が一つの習慣になると其間に兒童の自我觀念を高め、遂には我儘な、放縱な不良性を作り上げる結果になるので、此點は大に注意しなければならぬことである。

蒐集本能

此時期には一般に自我觀念が高まる結果、貪慾性が强くなつて來る。貪慾性に就ては、後に少年の不良性の章に於て說明する積りであるが、一言で謂へば、此時期は蒐集本能から何品に限らず數多く集めて見たがる傾向がある。之れは適當に制限して行かぬと、貪慾性を作り上げる虞れがある。これはどんな子供でも一度はさういつた傾向を表すものであるから、適當に矯正して行かなければならない。

故大場博士は其著書中に、凡ての犯罪の原因の八十%は貪慾性から來るものだと謂はれた。之れは大場博士が發見したことでもあるまい。さう云ふ說を唱へて居る人は外國にもあるが、此貪慾性が因をなして犯罪を犯す場合が

多いことは顯著な事實である。

最後に玩具と兒童との關係に就て少し述べて見やうと思ふ。一體子供は玩具を非常に喜ぶものである。然し玩具は只見て居る丈けでは滿足が出來ない。『もてあそび』と謂ふ名の如く、必らず之れを採つて見なければ興味がないのである。

次に兒童は奈何なる玩具を一番喜ぶかと云ふと、動くものと、小さいものである。此『動く』と謂ふ事は、變化を意味するので、變化に伴ふ刺戟を要求する本能から來るのであるが、兒童は之れを自分の意の如く動かす。卽ち支配するといふことに興味を持つのである。之れは前にも述べた支配本能の働きで、之に依つて兒童の優勝慾を滿足せしめるのである。

女の兒が人形やお雛さまを可愛がることは、よく吾々の目擊する處で、少しでも髮の毛が取れたり、鼻の頭が缺けでも仕樣ものなら、其心勢は並大体なものでない。甚だしきは、人形が病氣をしたのではないかと云ふ樣な事まで想像して介抱する處は、見るからいぢらしい位である。

又兒童は何故小さい物を好むかと云ふと、大きなものに對しては恐怖心を持ち易いのみならず、小さいものに對しては同情心が起る、是れは矢張り前と同じ樣に、優勝慾の滿足になるのである。女子が男子よりも一般に同情心が深いのは、こうした遊戲の間に自然に思ひ遣りとか、憐みといふ性質が養はれるためである。

次に兒童には如何なる玩具が最も適當であるか、如何なる玩具を選ばなければならぬかと云ふことを述べようと思ふ。

玩具は第一に智育的な物を選ばなければならない。一見惡戲の念を與へるものやら或は不快の念を起さしめるやうな物はよくない。さうして知らず識らずの間に、智能の發達を促すと云ふやうな物を選ばなければならぬ。

第二には衛生的の物を選ばねばならない。嗽叭のように何人の口にも觸れ易いものはよくない。玩具屋の小僧が『此方がよく鳴ります』など謂つてお初に吹いて見せる。來客が『一寸私が吹いて上げませう』などゝ愛嬌に吹いて見せる。若し其人に惡性の疾患でもあつたなら、未だ抵抗力の弱い兒童には直ぐ感染するのである。

第三には體育的の物を選ばなければならぬ。卽ち玩具に依つて身體を動し得るものでなければならない。例へば、自働車であれば座敷の隅から隅へ走らせるたんびに、自然に身體の運動が行はれる。卽ち之れに依つて、幼年の筋肉や骨格の發育を促すと云ふやうなものを選ぶべきである。

第四には經濟的なものでなければならない。大人の虛榮心を滿足せしめる爲めに、馬鹿に高價な玩具を子供に與へる人があるが、之れは大變宜しくないことである。或る敎育者の話であるが、近來東京などでは、護謨鞠が段々大きくなつて、値段も五圓六圓と云ふのがある。さう云ふ高價な物を子供に買つて與へると云ふことは、子供の虛榮心を唆る丈けで、何の益もない、日本では子供が七つになると七つのお祝と云ふことをするが、大きな長い着物を身動きも出來ぬ程何枚も重ねて歩かせる。是れは親の虛榮を滿足せしめるために、子供を犧牲にしたものである。子供の爲めから言ふならば、熱苦しい着物を着せて歩かせられるよりも、輕快な運動服でも着せられて、活潑に運動さして貰つた方がいくら宜いか知れない。斯う云ふ風に子供の自由を犧牲にして、親の虛榮心を滿足させるといふ事は、まことに見苦しい事であると謂はなければならない。

第五には審美的のものを選ばなければならぬ。卽ち玩具を弄び居る間に知らず識らず美的感情の養はれて行くと云ふものが一番宜しい。兒童は繪畵を喜ぶが、此間に美的感情が養はれて行くのである。

第六には寫實的の物を選ばなければならぬ。犬の玩具で足が五本あるやうなものは宜しくない。卽ちあまりに事實に遠ざかり、事實と矛盾して居るものでなく、事實に合致して居る寫實的のものでなければならぬ。以上擧げた諸點は吾々が玩具を選ぶ上に注意すべき點であると思ふ。

玩具の心理的價値

終りに玩具の心理的價値、卽ち玩具が子供の心理にどう云ふ影響を與へるか、心理上どう云ふ價値があるかと云ふ事に就て述べて見やうと思ふ。

吾々の心の働きは、見やうに依つて智、情、意の三つに分けることが出來る。之れはコップである、水差であると云ふのは、智の働きである。水は美味そうである、一杯飮み度いと思ふのは情の働きで、飮まふと決心して口に入れるのが、意の働きである。此三つの働きの方面から觀察して、玩具はどう云ふ影響を兒童に與へるかと云ふことを考へて見たい。

先づ智的方面から謂へば、玩具は兒童に推理の働きを與へるものである。小さい自働車の玩具を見ると成程自働車と云ふものは、斯う云ふものかと、實物を見ない先きに、之れを想像することが出來る。此想像の練習は、兒童の推理作用を促進せしむる意味に於て必要なことである。

次に情の方面から考へると、美術的思想を養成する上に大なる效果があるのみならず、一面に於ては同情心と云ふ樣な情操的感情を助長することが出來る。

更に意識の方面から觀察すれば、玩具は子供に決斷、勇氣、忍耐、持久といふやうな力を與へる。子供が電車や汽車の玩具を座敷中に轉かし廻り、其都度彼方に走り此方に走り何度となく同じ事を繰返す根氣さには何人も驚嘆せない者はない。さう云ふ間に、自然に忍耐と云ふ思想が養はれて行くので、一面には勇氣とか進取とかいふ樣な氣性も養はれるのである。

さう云ふやうに兒童心理研究の上に於て、玩具は重大なる關係を有つて居

るので、何れの家庭に於ても此問題には無關心では居られない大切な問題であると思ふ。

第三　少年期の心理狀態

少年期の特徴

嬰兒から幼兒、幼兒から少年と段々年齢を重ね經驗を積むに從つて、心理作用は愈々複雜になつて行く。此心理作用を一々說明すると云ふことは、固より困難であるから、爰では少年の心理狀態中、特に顯著なる現象に就て二三述べやうと思ふ。

(一)　知覺作用

少年期に於て一番吾々の注意しなければならぬ點は、知覺作用が非常に鋭敏になつて來ることである。知覺と云ふのはどう云ふことを意味するか、又感覺とはどう云ふ風に違ふかといふと一言で盡せば、感覺と云ふのは前にも述べた通り、事物の刺戟――暗示に對する直感作用を謂ひ、知覺とは此感覺に經驗と判斷とが加はつたものを謂ふので、換言すれば事物が吾々の視覺を刺戟する、其刺戟に依つて直ちに直感する、此作用が感覺である。例へば水入れに觸れて冷いと感ずる。之れは觸覺から來る所の刺戟を直感するのであつて、此感覺に經驗と判斷とが加つた時に、此れは水だと認識する、之れが知覺である。汽車の窓から見ると山や河が後に走つて居るように見える、それは感覺である。そこに經驗と判斷とが加はると、之れは山や河が後に走るのではなくして、自分の乘つて居る汽車が前に走るのであると云ふことを知覺する。又遠方に騎兵が馬に乘つて居る。之れを遠くから見ると、まるで一寸法師のやうに見へる。それは感覺である。けれ共、吾々の經驗と判斷と云ふものが加つて、あれは一寸法師でもなければ、人形でもない、五尺豐かな堂々たる騎兵であると云ふことを知覺する。又手の指先きに赤いインキが附いて居る。此赤いと云ふことを直觀するのは感覺である。然しそれは血液で

なく赤インキであると云ふことを知るのは知覺である。

幼年時代には感覺が盛んになると云ふことを前に述べたが、此感覺が少年時代に這入ると、知覺と云ふものになつて來る。所が今も說明した通り、知覺は經驗と云ふものが一つの要件になつて居るが、少年時代は未だ青年時代と違つて事物に對する經驗が少く之れに對する判斷力に乏しいから、勢ひ、知覺に往々錯誤を生ずることは免れない現象である。子供が馬を書いて居るのを見ると、馬の脚を三本書いたり、人間の體を書く時に頭を落したり、或は眼と口丈け書いて鼻を落したりする。さう云ふ現象は卽ち知覺の錯誤から來るのである。

そこで少年に對しては、知覺の敎養と云ふことが大變必要になつて來る。然し、知覺は始めは單純より後に複雜へ、具體的より抽象的に進めて行かなければならぬ。初めから六ヶ敷いことを要求するのは宜しくない。矢張り順序を追ふて知覺の發達を促して行くやうにしなければならぬ。之れは非常に少年敎育の上に大切なことである。

ニウトンは林檎の實が庭に落ちるのを見て、地球の引力を悟り、ワットは湯沸しの蓋が湯氣で持上がるのを見て、蒸氣力を知つたのは、平素彼等が些々たる事柄にも注意を怠らなかつた結果である。

吾々の前には常に無數の暗示が有るのであるが、之を捕ふるも逸するも畢竟注意の有無に依つて定まるので、其結果には實に驚くべき差を生ずるのである。

ニウトンは『凡人と智者との差は畢竟注意の有無に外ならず』と謂つたが、確かに至言である。よくあの人は悧巧だとか馬鹿だとか言ふが、多くは其人の注意力の强弱に依つて評價されるのである。

だから、少年時代に注意力を促す方法を講ずることは、少年の知覺を發達

せしめる上に於て、極めて大切なことである。換言すれば少年教育の目的は少年の注意力を啓發して之を善導するに在ると謂つてよい。

此點は少年教育の任に當る者の常に考へ置かなければならぬ大切な問題である。

（二）想像作用

少年の心理中其特徴として次に擧くべきものは、想像作用である。

少年期には智能の發達に伴ひ、想像作用が非常に旺んになる。少年の想像作用が如何に强烈であるかは、少年の言葉の中に多くの虚僞があり、摸倣があることに依つても知ることが出來る。

例へば、竹箒を馬の代りに遊んで居るのを見ると實際本當の馬に乘つてゐる樣な氣になつて居る、吾々の眼から見ると、馬鹿氣きつたことでも當人は至極眞面目である。得意滿面である。彼等の頭には一本の竹箒も銀鞍白馬の如くに感じられるのであつて、此は彼等の想像作用が旺盛になる結果に外ならない。

少年の想像作用は、其智能の發達の上に、極めて大切なことであるのは謂ふ迄もないが、又考へ樣に依つては頗る危險なものである。

心理學者は想像作用を事實的想像と創造的想像との二つに分け、事實的想像は或る經驗の復寫で卽ち事實を再び頭に寫し直すことを謂ひ、創造的想像は經驗を離れて或る事實を建設し、創造することを謂ふて居る。

想像力は發明家や美術家にとつては、最も大切な條件になつて居る。少年の想像力を啓發して行くには、絶へず少年に對して想像作用の新らしい材料を提供してやらなければならない。

概して想像力は婦人は男子よりも、又子供は大人よりも强いものである。婦人は殆ど男子の想像することも出來ないやうな事柄を、如何にも眞實らし

く想像するのが常であつて、場合に依つては其想像に稍々惡性を含んで居ることさえある。俗に邪推と謂ふのが其で、殆と婦人の通有性と謂つても宜いが、子供の想像も亦之と同じ樣に惡性を帶びて來る場合がある。夫れが卽ち虛僞性と謂ふ最も怖るべき不良性であるものであるが、之れは畢竟想像作用が盛んな結果である。此童話——昔噺しと云ふことは、吾々少年心理を研究する者にとつて、非常に大切な問題である。吾々が幼少の時に祖父や祖母の膝の上で聞いた桃太郎やカチ〳〵山の噺は、今も尙懷かしき記憶の底に殘つてゐる。

何れの時代何れの民族にも童話の無いものはない。童話の精神は兒童の想像作用を啓發するに在ることは勿論であるが、一面には兒童の推理作用を促進し其間に道義觀念を涵養するに在るのである。だから童話は或程度迄は事實に根據を有するものでなければならない。餘りに事實に遠ざかつた童話は、動もすると少年の虛僞性を釀生するの虞れがあることを注意しなければならない。

童話を離れて兒童を考へることが出來ぬように童話と兒童との間には親しい關係が有る。然し兒童の知能が進むに從つて、此親しき關係が漸次疎ぜられ遠ざかる傾向があるのは止むを得ざる次第で、十五六歲になれば最早童話には趣味を失ひ、寧ろ宮本武藏の武勇傳やロビンソンクルソーの冒險談などを歡迎するようになる。それは兒童の理性が進むに從つて、懷疑や批判が起つて來る結果に外ならない。

桃太郎の鬼ヶ島退治の昔噺は、何時頃から我國に行はれたものであるか判らないが、餘程古くから人口に膾炙せられたものに違ひない。或人は之れは日本個有の童話ではなく、外來の神話であらうと謂つて居る。希臘と云ふ國

は神話に富んだ國で、桃太郎と同じやうな神話もある。或人は日本の桃太郎の噺は、希臘の神話を燒直したものではないかと謂つて居るが、此桃太郎の噺の中には、吾々の學ぶべき點が少くない。

犬猿雉に對する桃太郎の温情や、其恩義に感じて死生の巷に奮闘する犬猿雉には吾々の大いに學ぶべき點がある。桃太郎が鬼を退治て、澤山の寶物を分捕り、車に積んで老人夫婦を喜ばせ、永い間養はれた恩義に報いたことなどは男々しい中にも優さしい人情美が表はれて居る。其外伽の全體を通じて冒險や進取の氣象が溢れて居る許りでなく、見るからに恐しい赤鬼や青鬼、其上武器と云ひ、城壁と云ひ、凡ての點に於て、戰鬪力の勝れた惡魔の軍と戰つて大勝を捷ち得た痛快味や、正義は最後の勝利を得ると云ふ尊い敎訓が含まれて居るのである。

斯くの如く、童話は少年敎育上極めて大切な問題であるが、兒童の年齡に應じ其智能に相當な材料を選擇して行くことが緊要である。然るに、老人などは其邊には一向頓着なく、隨分大きくなつた子供にも、相變らず昔々あるところにと云つたやうなことを話すが、少年の理性は、最早そんな伽には承服が出來ない。强いて承服せしめ樣とすれば、其間に怖るべき虛僞性を作つて遣る結果になるのである。

少年は又想像作用が盛んである結果、凡てのものを人間化することに非常に趣味を有つて居る。鬼でも、象でも、獅子でも、皆自由自在に之を人間化する。少年の愛讀する繪本には、象や獅子が洋服を着て帽子を被つて居る繪が澤山あるが、斯う云ふやうに凡ての物を人間化することが興味を惹くのである。

少年は又想像作用から其摸倣性を高めることも注意すべき事である。先頃の新聞で見ると、一少年が東海道線で進行中の汽車の前に立塞つて、危く轢

殺され相になつたのを救出して段々調べて見ると、活動寫眞で覺へた忍術で汽車の進行を停めようとしたのであつたが、果せるかな汽車は少年の前で停まつた……實に少年の摸倣性の強烈さ加減は、吾々の想像以上である。

(三) 記憶作用

次に少年心理の中で、特筆すべきものは記憶作用である。子供が鐵瓶の湯氣で一度火傷すると、もうそれから後は鐵瓶の湯氣の出る處へは手を出さない。之れは矢張り記憶の結果である。或は一度熱い湯に入れると、もう湯と云ふものは熱いものだと云ふ風に思ひ込んでしまう。苦い藥を飲んだ後は、藥と云ふものは何んでも苦いものだと思ひ込んで、二度目からは容易に飲まない。是等は矢張り少年の記憶作用の結果である。

心理學者の說に依ると記憶には四つの作用がある。

醫得 第一が習得である。習得と云ふことは經驗の反覆を謂ふので、意識的に經驗する場合と、無意識的に經驗する場合とある。さう云ふ經驗が數重つて行くことが卽ち習得である。

把持 第二は把持である。把持と云ふのは刺戟に依る感應を持續することである。例へば、或物を見る、或物を聽く、或物に觸れる、或物を嗅ぐと云ふやうな一種の感應に依る精神上の變化を、其儘に持續することである。

再認 第三は再認である。把持の狀態に、偶々新たなる同一の刺戟に觸れることがある。それを再び觀念することが卽ち再認である。

統一 第四は之れを統一することである。

記憶といふ觀念は、要するに此四つの要素からなつて居るものであるが、概して少年期の記憶は、心理的でなくして寧ろ機械的である。例へば少年はよく唱歌を暗誦するけれども、其意味が判らないのが多い。意味が判らなくても唱歌の文句をよく記憶して居るのは、全く少年期の記憶が機械的である

證據である。それが段々青年に進み、經驗が積まれ、智識が進んで行くに從て、記憶作用は機械的から一歩々々理論的に進んで行くのである。

吾々が少年時代によく歌つた軍歌などを。何かの機會に想い起して、獨言のやうに歌つて見る時に、そこに初めて斯う云ふ意味の歌であつたと云ふことを感ずる場合が多い。さう云ふ風に、少年時代の記憶は殆ど機械的である。此記憶力の善い惡いと云ふことは、將來少年の精神上の發達に重大な關係を有つて居るのである。

(四) 感情作用

少年の心理狀態中著るしい第四の點は感情作用である。感情作用と云ふことは、快不快を感ずる作用である。嬉しいとか、悲しいとか云ふ感覺が、卽ち感情である。普通に云ふ感覺は外部から來るもので、感情は內部から來るものを云ふのであるが、一口に感情と謂ふても其處には美的感情と智的感情と二つの種別がある。子供が音樂を好み、繪畫に趣味を持つのは、畢竟此美的感情の結果に外ならない。

元來動物の本性から謂へば、男性は女性よりも美的である。獅子でも、孔雀でも、男性は女性の前に其美を誇り、牡蟬は其美聲で牝蟬を惱殺して居る。こうゆう風に、男性は其優れた肉體美や音聲美によつて、女性を恍忽たらしめ、之を征服して居る。之れが動物の通性である。

婦人が美々しく着飾り、紅粉に浮身を窶つして居るのは、畢竟女性の肉體美が男性の肉體美に及ばぬ事が甚だ遠いからである。然るに世の男性は動もすれば女性の前に誇るべき男性美あることを忘れ、虛僞虛飾の紅紛を裝ふた女性美に迷ひ、身も魂も奪取られるといふ事は、如何にも淺ましい限りで、吾々は何處迄も尊い男性美を失はぬやうに力めなければならない。近來女性的男子が滅切り增え出し、婦女子の眞似に日も之れ足らぬニキビ青年が殖え

て行くのは、返す〳〵も遺憾な事である。

さて少年期に於て美的感情の發達に伴ひ、一面に性的情操が急速に發達して來る。此時代に一歩を誤れば、取返しのつかぬ軟弱少年になつて仕舞ふのである。少年の性的情操を適當に善導すると云ふことは、少年感化の上に最も至難とする處である。

少年期は又美的感情と同時に智的感情が進んで來る。

少年は詰らぬ事に吃驚したり、恐怖したり、忿怒したり、或は美しい同情心を起す場合が多い。殊に少年の同情心は主動的に他人に對する許りでなく、受動的に他人から同情心を待ち設ける傾向がある。例へば路傍に蹶躓いて倒れると、何時迄も獨りで起上ろふとはせず、誰かゞ着物の塵でも拂つて、優しい言葉でも掛けて呉れるだろふと待設ける傾向がある。此傾向を適當に矯正することは、少年教育上緊要な點である。

（五）推理作用

最後に少年心理の中で、顯著な點を擧げれば、其推理作用である。

抑も推理と云ふことは、人間心理の中で一番高尚な働きで、其の發達の順序から謂へば、觀念から概念を生じ、更に判斷から推理に進むのである。觀念と云ふことを一言で盡せば、刺戟に對する一つの直觀である。卽ち我家の犬は「ブチ」である、隣の犬は「タマ」であると云ふ風に觀念し、此觀念から更に進んで、犬と云ふ一つの概念を得る。自分の家の「ブチ」と隣の「タマ」とは違つて居るが、兩者に共通の點を見出すことが出來る。卽ち足が四本あつて、尻尾があつて、耳が立つて居て、さうして活潑に走るものと云ふことに就て、「犬」といふ一つの概念を得るやうになる。又他の例を以て謂へば初めて自分の家に遊びに來た男子に小父さんと云ふ言葉を使ひ、同じ樣に初めて見た婦人に小母さんと云ふ言葉を使ふ、すると、小父さんと云ふのはあの人一人で

ある、小母さんと云ふのもあの人一人であると觀念するが、暫くすると小父さんと云ふのはあの男一人ではない、相當の年輩の人は皆小父さんだ、小母さんだと云ふ一つの概念が起つて來る。是は判斷に依つて推理作用を進める所以である。

智識慾

少年期は又智識慾が旺盛である結果、何事でも知りたがる。見たがると云ふ傾向がある。詰らない事でも、あれは何と謂ふものか、どういう譯かと言うやうに、常に外界の刺戟に對して注意を怠らないのは、畢竟推理作用の基礎を爲す觀念作用を促進するために、外界の暗示を要求する本能に外ならないのである。

第六章　少年の不良性

第一　總說

不良少年問題中一番重要な點は、少年の不良性の研究である。緒論以來縷々述べた事は、要するに不良性を研究する爲の一つの準備に過ぎないのである。

凡そ少年が不良性を帶びるに至る原因は、之れを主觀的方面と客觀的方面と兩方から觀察することが出來る。主觀的方面とは、少年の性癖、健康、遺傳、年齡等から之を觀察することを謂ふので、言ひ換へれば少年の心理的方面と生理的方面から觀察を下すことで、之れが卽ち少年の不良性の主觀的研究である。次に客觀的方面とは家庭、敎育、宗敎、經濟等の關係から少年の不良性を帶びるに至る原因を觀察することで、之れが卽ち少年の不良性の客觀的研究である。

第二　盜癖

(一)　所有の觀念

盜癖を說明するに先立ち、「所有」の觀念がどう云ふ風に發達するかと云ふことを簡單に說明する必要がある。

嬰兒に何物でも與へると吃度自分の口に持つて行く。之れは動物の營養本能から來るので、雛鳥が生れると直ぐ餌を探し廻るのと同じである。誰に敎へられるといふ譯もなく、營養攝取のために動くのが動物の本能で、之れが所有觀念の基礎になつて居る。

嬰兒が稍成長すると、自分の有つて居るものを他人から取上げられた時に泣き出すのは、所有觀念の萠芽とも見るべきものであるが、自分の持つて居る物を他人に奪はれた時に泣く許りでなく、次第に他人の持つて居る物を欲しがるようになる。此時期に選擇と云ふ心の働きが始めて起つて來るので、

自分の持つて居る物よりも、どうも人の持つて居る物の方が善い樣に思はれ、澤山ある中から一番自分の氣に入つた物を選擇すると云ふ心の働きが起つて來るのである。それが段々進んで來ると、今度はあれは人の物であるから取つてはいけないといふ事を納得するやうになる。卽ち之れは人の物であるから取つてはいけない、人の所有權を犯してはいけない、と云ふ觀念が此時に起つて來るのである。所有の觀念は大體さう云ふ順序に進んで來るのである。

前にも一寸說明したが、少年時代に於ては支配本能が非常に强烈である結果、凡ての物を自分の支配下に移し度いと云ふ優勝慾の爲めに、聚集性と云ふものが一面に起つて來る。之れは單り人間許りではない。他の動物にも觀る所である。畜犬に食物を與へると、其一部分を土中に埋めて隱す癖がある。是は矢張り聚集性—凡ての物を聚めて自分の物とし、他人から侵されないように、確實に安全に自己の勢力範圍內に置かうと云ふ本能から來るので

ある。少年時代に於てよく觀る所であるが、棒切れや紙切れなどを集めて喜んで居るのは、畢竟此動物の聚集本能の作用である。此本能は之を適當に矯正し善導せざるに於ては、遂には貪慾性を助長し、最も恐るべき盜癖に變ずることは、前章に於て詳述した通りである。

（二）盜癖の原因

爰に盜癖はどう云ふ原因から來るかと云ふことに就て考察したいと思ふ。盜癖の原因として第一に擧ぐべきは虛榮である。少年は屢々述ぶるが如く一般に優勝慾が盛んである結果澤山の品物を持つて居るとか、立派な玩具を持つて居ることを、自分の仲間に誇らうとする傾向がある。此優勝慾の滿足を得んとする虛榮心から、盜癖が生ずる場合が多い。

殊に少年は其境遇から受ける影響が大なる丈けに、此盜性は少年の境遇如何に依つて、消長を來すことは勿論である。隣りの坊ちやんは自働車や、自

轉車や、珍らしい玩具を澤山有つて居るが、自分には一つの玩具さへ買つて貰へないと云ふ一種の淋しい感想から盜癖が知らず識らず起つて來ることがある。然し此等は全く同情すべきもので、不良少年の大部分はこうした氣の毒な境遇から不逞に陷つた者である。

兩親が無いとか、有つてもそれが繼父母であるとか云ふやうな家庭に成育した少年は、多くの場合に自分の優勝慾を滿足せしめることが困難である處から、動もすれば友達の玩具を盜むとか、緣日に商品を掻浚つて來ると云ふことになるのである。

第二に盜癖は一種の惡戲に原因する場合がある。之れは私が曾て取扱つた實例であるが、或不良少年に就て其原因を段々調べて見ると、盜みと云ふことを最初覺えた動機は、友達同志が敵味方に分れて、戰爭ゴッコをした時に幸か不幸か其少年は、敵の武器を盜んで來る役目を與へられた。少年は盜み

の方法に就て少からず頭を惱ました結果、とう〳〵敵に發見せられずに、澤山の武器を盜取ることが出來、味方の者から其智略と勇敢を褒められたのが、盜みをする原因であつたと云ふ告白を聞いたことがある。故に少年の遊戲に就て、常に細心の注意を拂はざれば、大切な少年が何時の間にか最も恐るべき盜性に囚はれ、遂には濟度することが出來ぬ者になつて仕舞ふのである。

少年は又他人を困らせ、閉口させることに興味を持つものである。二階に人が居る間に、そつと梯子を取外づしたり、來客の帽子を隱しては、人の困るのを喜んで見ると云ふ樣な傾向がある。而かも此傾向は單に人間に對して許りでなく、猫の頭に紙袋を冠せて喜んで見たり、眞直に立つて居る植物を無理にへし曲げたり、道草にも木の葉や枝を折つて見ると云ふ風に、動物や植物に迄、此傾向が表はれる。斯う云ふ惡戲から、自然に盜癖と云ふものが釀成されることは注意すべき事であると思ふ。

次に第三の原因として恐怖から來ることがある。よく吾々が聽く事であるが、掏摸や搔浚ひの親分の手に養はれた少年は、親分の叱責に對する恐怖心から窃盜を爲す場合が多い。彼等の親分は彼等にして若し一日でも仕事がなかつたら、喰ふ物も喰はせない、着る物も與へないといふ風に、それは〳〵殘酷な取扱ひをする。甚しきに至つては、蹴つたり踏んだり有らゆる凌辱を加へる。斯う云ふ境遇に在る少年は、此恐怖心から窃盜癖と云ふものが生じて來るのである。良家の少年が、惡少年の恐喝に遭ひ、恐怖心から自分の家の品物を盜み出すことがあり、こうゆう事が繰返される時に、爰に盜癖といふものが立派に出來上つて仕舞ふのである。

第四は模倣から來る場合である。少年の模倣性の强烈さは前にも一寸述べた通り、理智性に缺け感激性に富んで居る少年は、往々にして他人の模倣に依り盜癖に陷る場合が多い。例へば友達が盜みをするのを見れば、すぐ之れ

に眞似る。強賊の活動寫眞を見ると、すぐ其眞似をするのである。近頃は餘り無いやうであるが、以前は「ジゴマ」と云ふ一種の恐喝が非常に流行した事がある。之れは窃盗とは稍々其趣きを異にして居るが、一定の時間一定の場所に何程かの金錢を持ち來れ、若し此事を警察に密告すれば一家を鏖殺すると云ふやうな脅迫狀を送る、所が往々にしてそれが成功する。さう云ふことが新聞の記事にでも掲載されると、之れは面白い一つ自分もやつて見やうと云ふ模倣心から、別段金錢の必要に迫られたといふ譯でなくとも、さうしたことを眞似る者が續出して來るのである。だから、當時新聞紙に「ジゴマ」類似の犯罪の内容を記載することを、禁止せられたことが有つたように思ふ。

兎に角新聞記事に依つて少年がさう云ふ悪い方面に誘致されたと云ふやうな實例は外にも幾らもあることである。それで、外國に於ては活動寫眞であるとか、或は少年の愛讀する刊行圖書と云つた樣なものに、隨分思切つた取締を實行して居るものが少くない。

疾病　第五に疾病から來ることがある。疾病の中には稍々經續的のものや、遺傳的のものもあるが、同時に又一時的な發作的な病的狀態もある、父親は泥棒の前科者で、母親も手癖が悪いと云ふような家庭に育つた少年は、盗癖の遺傳を受けることが多い。中には生來の痴呆で、他人の物と自分の物との見界ひがないと云ふやうな者もある。

犯罪系統　川越少年監獄で大正二年から大年八年迄七年間に收容した少年四千七百五十七人中、犯罪系統を有する者は三百四名であるが之を類別すれば、

實父	百四十九名
實母	十五名
實兄	七十九名

祖父母	十一名
伯叔父	二十八名
從兄弟	十名
其他の近親	十二名

の犯罪系統を有する者があつた。此は注意すべき統計であると思ふ。

右の遺傳の外に一時的の生理上の變化から竊盜をすると云ふ場合がある。よく吾々が經驗することであるが、婦人の萬引は生計の困難から來る場合が尠く。寧ろ相當な地位や資產を有つてゐる中流以上の婦人に多い。殊に此等の萬引婦人を調べて見ると、常習性の者を除けば、殆ど其八十%までは月經時に突發した犯罪であることは、注目すべき現象である。

婦人の月經と犯罪

婦人の月經が其精神上に及ぼす影響如何に就て、以下簡單に述べようと思ふ。

婦人の月經時に於て最も顯著な現象は、羞恥の觀念が極度に昂進することである。殊に月經開始期の少女は一葉女史の「たけくらべ」に現はれた美登利のように、人に顏を見られるさへ恥かしい樣な、打沈んだ氣分になる。平生往來して居た友達とも、成るべく交際を避けて一室に閉籠り、何とは無しに考へ込む。必要以外な言葉は、骨肉にも使はないと云ふ風になる。斯の如く月經時は羞恥の感念が極度に高まると共に、一面には感覺が異常に銳敏になり、感情が動搖し易く、一般に情熱的になり、感溺的になるのである。

之を要するに、月經時の婦人の精神には一種の異狀を呈して來る結果、僅かな刺戟に對しても抵抗力が無くなる。有つても其働きは極めて微弱である。だから、平素美しい着物を着て見たいと云ふ感想を有つて居る婦人が、偶々美麗な着物の前に出ると、俗に咽から手が出ると云ふが、婦人の目から手が出るのである。それから吾々の常に經驗する處であるが、放火犯は婦人

の手に依つて行はれる場合が多い。而かも其犯罪時の生理狀態を調べて見ると、不思議にも、多くは月經時であることに一致するのは注意すべき現象である。

先年小石川で或醫師の家庭に起つた事件であるが、或感情の行違ひから細君が非常に悲觀して、一層夫への面當に死んで仕舞ふと決心した。私かに藥室からストリキニーネを取出して自分の部屋で將に之れを仰ふとした。それを見た十四歲の娘が、母に其譯を聞くと、お父さんから叱られたから死ぬのだと答へた。娘は母さんが死ぬなら私も一緒に死にたいと言ふて居る處へ、小さい妹や弟が三人やつて來た。娘は一層みんなで死にませふと母にせがみ到々親子五人が枕を並べて死んだことがある。私は當時現場で色々取調べた結果、其婦人が月經時であることを知つた。斯う云ふ風に、婦人の月經時は、餘程注意しなければならぬので、さう云ふ時期には喰べ物でも、見る物でも、聽く物でも、餘り刺戟性のものを避けることが緊要である。

性慾

第六は性慾から來ることがある。性慾と云ふよりは寧ろ變態性慾と云ふた方が適當かも知れぬが、よく世間に婦人の使用するリボンや半襟や洋傘と云つたやうなものを盜む少年がある。別段そんなものを盜んでどうすると云ふ考もない。只何んとなく婦人の體に着けて居たものに觸れて見たい、其が彼をして一種の快感を覺へしめ、變態性慾の滿足を與へるのである。世にはこうゆう動機から犯す犯罪もある。

趣味

次に述ぶべきは、趣味から來る盜癖である。之れは少年に直接の關係はないが、私が嘗て檢事を奉職中取扱つた事件であるが、或資產家の夫婦が一呉服店で萬引の嫌疑で逮捕されたことがある。夫婦の身體を隈なく調べると、亭主の懷から反物が轉げ出る、妻君の脊中から切地が食み出すといふ始末で、之れには流石の警察官も舌を卷いた。

相當の資産家の夫婦、其れが揃ひも揃つて二人で萬引をすると云ふことは、一寸想像の出來ないことである。殊に其男は當時或會社で、金錢出納の事務を執つて居た關係上、或は其邊にも犯罪が潜んで居るかも知れないといふことになり、同人の家宅を捜索して見た所が、倉庫の中に大きな長櫃があるので、念の爲めそれを開けて見ると、驚いた、其處には反物類、洋傘、靴、鞄と云ふやうに有らゆる雜貨が山の樣に藏匿してあるのを發見したのである。當時私の最も不審に堪えなかつたのは、其等の盜んだ品物は悉く手も觸れず、反物類なら符牒の着いた儘で仕舞ひ込んであつたことである。

別段反物を着物に仕立てゝ着ると云ふ譯でもなし、それを賣つて金に代へると云ふ譯でもない。時々思出した樣に夫婦の者が倉の中で長櫃の蓋を取つては隨喜の涙を流して居たのである。私は猶ほ會社に出張して、彼の平素取扱つて居る帳簿を引上げて詳細に取調べて見たが、調査の結果は私の豫想に反して、彼の執つて居る事務の上には寸毫の不正がない、自由に誤魔化し得らるゝ金でも頗る几帳面に正直に取扱はれて居るのを發見した。そこで、私は此現象を非常に不思議に感じ、其原因に就て尠からず迷つたのである。

第一に犯罪の遺傳が無いかといふ事を、男女兩方面に亙つて出來る丈け詳細に調査して見たが、一向さう云ふ點も見へない。そんなら性來の貪慾性から來たものかと云ふと、さうでもない。前にも述べたやうに、若し眞に貪慾性から來て居るものであつたら、自分の取扱つて居る手近かな會計事務の中に先づ第一指が向けられなければならぬ筈であるのに、そんな氣配が微塵もない。寧ろ几帳面過ぎる程眞面目にやつて居る處から見ると、之れが性來の貪慾性から來たものとは如何にしても受取れない。そんなら、虚榮から來て居るかと云ふと、周圍の關係から見て、其が單純な婦人の虚榮に原因したものとは解せられない。又此事件は偶發性の犯罪でない事は、數年來引續いて犯

されたことから明瞭である。無論境遇上の缺陷又は生活上の窮迫から來たものでないことは、數萬圓の資產を有し富裕な生活をして居る點から見て、左樣な觀察を下す餘地の無い事は謂ふ迄もない。

さうすると一體此犯罪の原因は何處にあるか、頗る疑問になつて來るのである。私は此點に就て可成り苦心をした末、獨逸のフォン、リスト博士の「趣味性に出づる犯罪」といふ論文を想ひ起して、此こそ趣味性に原因する犯罪に違ないと、思はず自分の膝を打つた事が有る。

落語の口調ではないが、凝つては思案に能はずで、碁や將基に凝つた人は、寢床に就いても新らしい手を考込んで居るものだと聞いたが、此夫婦も恰度それと同しで、只萬引することが堪らなく嬉しいのである。それが彼等の趣味性に一致したので、斯う云ふ犯罪は、總ての犯罪の中で最も矯正し難きものとされてあるのである。

此意味から謂ふても、少年趣味の研究は少年教育上非常に大切なことで、常に高尙な趣味を涵養して行くことに努めなければならぬと思ふ。

私の經驗から謂ふと、不良少年と謂はれる者の大部分は、運動に格段な趣味を有つて居る樣である。或は運動と云ふよりも、競技と云つた方が適當であるかも知れない。例の野球の選手だとか、柔道の選手とか云ふ者の中に、不良な少年を發見する事が多いのは事實である。之れは一體どう云ふ譯か、吾々として是非考へなければならぬ問題であると思ふ。

私はさう云ふ少年に向つては毎つも君等は何の爲めに運動するのかと云ふ問を發して見るが、之に對して完全な答を得ることは殆と不能で、大概は運動の眞の精神を忘れて、競技の末に走つて居るものが多い。彼等には運動に依つて、心身を鍛ひ上げやうと云ふ高尙な考へがなく、競技選手になつて見度いと云ふ輕薄な考に囚はれて居る者が多いと云ふことである。尤も、學校

に依つては、其經營上の必要からさう云ふ少年を歡迎し優遇する傾向がある
のは、止むを得ないことであるが、學校の廣告用に使役されて居る學生こそ
よい面の皮で、こんな馬鹿々々しい事は無いと思ふ。少年の運動から若し此
心身鍛練の精神を取去つたならば、單なる競技に過ぎない。此點は少年教育
上注意すべきことであると思ふ。

脅迫　盜癖は又脅迫觀念に原因することがある。近來は餘り耳にしないやうであ
るが、田舍の小學校で生徒の辨當が紛失することがある。是は少年が空腹か
ら起る一種の脅迫觀念に原因する。總じて、少年は其境遇から生ずる脅迫觀
念のために、盜癖に陷る場合が多い事は、注意すべきことであると思ふ。

境遇と犯罪　大正七年度に於ける小田原少年監獄に收容された百四十名の中

赤貧者　四十名

無資產者　九十五名

稍資產有る者　九名

有資產者　無し

此點から見ても、境遇の善惡が如何に少年に重大な關係を有つて居るかと云
ふことが判ると思ふ。

同じく大正七年度の小田原監獄の少年四千四百四十名の中で、

兩親共にある者　五十四名

何れか一方無き者四十七名

兩親共に無き者　二十九名

繼父母　十二名

養父母　二名

である。此統計から見ると、養父母の下に養はれて居る者を除き、父母に欠
缺有る少年は八十八名で、兩親揃つて居る者は五十四名と云ふ結果になる。

此點から見ても兩親の欠缺して居る家庭には、多くの不良少年が生れると云ふことは疑を容れないことである。斯う云ふ家庭に育つた少年は、其境遇から一種の脅迫觀念に襲はれ、知らず識らず不逞の淵に沈むのであつて、此種の不良少年は最も同情すべきものである。

第三　嘘言癖

少年の嘘言は、如何なる心理作用から來るか、嘘言には如何なる種類があるか、如何なる原因に據るか、又如何にして之れを矯正すべきかに就て、次に述べようと思ふ。

(一)　嘘言の種類

西洋の諺に『嘘言は弱者の武器だ』といふ事がある。動物に保護色と云ふものがある。木の葉が青い時は蛙の背中が青いが、木の葉が黄ばみかゝると蛙の皮膚も黄ばんで遠方から見ると木の葉か蛙か判らないやうになる。是れは強敵から自分の身體を保護する爲めに、自然に外界の刺戟に依つて皮膚の色が變つて行くのである。軍人がカアキ色の制服を着るのも、砂地か人か判らない樣に、敵の視線を欺くための一種の保護色に外ならない。

斯う云ふ風に、嘘言は畢竟弱者の強者に對する一つの武器である、保護色であると見ることが出來るのである。

凡ての癖の中で、嘘言の癖位早くつくものはない、昔から嘘癖は泥棒の始めと云ふが、『詐り』は凡ての罪惡の源である。本居宣長翁は『ツミとはツヽミ隱す意なり』と言はれて居る。自分の考へた事、爲した事を包み隱すことが、卽ち罪である、罪惡であると云ふのである。卽ち嘘言癖は總ての不良性の先驅であり、先發隊で、嘘言癖位習慣性のものはないのである。

然らばどう云ふ時に嘘言が習慣性になるかと云ふと、大體二つの原因がある。卽ち不用意の間に嘘言を言つたことが偶然成効したと云ふ場合に興味を

感ずるのが其一つである。例へば子供が病氣でもすると、平生より美味しいものが喰べられるので、子供は病氣だとさえ言へば、毎つも美味しいものが貰へるものだと思ひ込んで仕舞ふから、美味しいものが欲しい時は、矢鱈に腹が痛い〳〵と言ひ出す樣になる。そうして若しそれが一度でも成効すれば、茲に興味を感じて忽ち嘘言の習慣性が出來るのである。

他の一つは偶發的の嘘言ではなく、豫め計畫した稍組織ばつた詐りで、人を陷れることに趣味を持つ場合である。例へば金を落したとか、掏られたとか、詐りを云つて何か爲めにする場合である。前に述べたのは無意識的の虛僞であるが、後の場合は有意識的の嘘言で最も惡性のものである。此意識的な計畫的な嘘言が偶々成功した場合に感する興味は、無意識的な偶發的の嘘言が成効した場合よりも更に深いのである。さう云ふ興味を屢々經驗し繰返す中に、知らず識らず其處に一つの習慣が出來上るのである。

(二)嘘言の心理

次に嘘言はどう云ふ心理作用から來るかと云ふ事を簡單に述べよふ。或心理學者は子供が嘘を言ふのは、寧ろ自然であると說明して居る。

卽ち少年は經驗に乏しく觀察力が弱いため、判斷に誤謬を生じ易いことが其一つの原因である。例へば、四本の足さへ有れば牛を見ても馬だと言ひ、馬を見ても牛だと云ふ風に、判斷の誤謬を招き易いことは、少年の心理上免れ得ないことである。さう云ふ意味に於て少年の詐りは、寧ろ自然的だとも見ることが出來るのである。

もう一つの原因は、少年は語能が發達しない爲めに、自分の感情を充分に言ひ表すべき言葉を知らない所から、往々にして無意識的に詐りを言ふ場合があある。

又少年期は想像作用が非常に盛んになつて來る結果、往々にして觀念の混

淆を來し易い。從て錯覺や幻覺に捕はれ易い傾向がある。

錯覺と云ふのは或る觀念が事實と齟齬する場合で、例へば石の地藏と觀念したことが事實は人であつたと云ふやうな場合を謂ひ、幻覺と云ふのは全然跡方もないことに、一種の想像作用から一つの觀念を作り上げる場合を謂ふのである。一茶の『明月を取つてくれいと泣く兒かな』といふ俳句が有るが、之は少年の錯覺を詠んだものである。子供が惡夢に驚かされ、覺醒後にも猶ほ一種の脅迫觀念に囚はれて、泣き止まぬ場合がある。何か恐ろしい夢でも見ると眼が覺めた後でも、幻覺に伴ふ一種の脅迫觀念から遁れる事が出來ない場合が有る。虛僞の心理は全く此點から來るので、前に少年の嘘言は寧ろ自然的だと述べたのは此意味に外ならないのである。

(三)嘘言の原因

次にどう云ふ原因からう少年が虛僞を云ふやうになるかと云ふことに就て一言して見たい。

嘘言の原因に就て、第一に擧ぐべきは恐怖心である。卽ち少年が惡戲をして障子を破つたとか、硝子戸を壞はしたとか云ふやうな場合に、大變に叱責する家庭では、往々にして少年を嘘つき者にしてしまう事がある。是は前にも述べた通り、少年は運動本能が盛んであるから、亂暴をしたり、惡戲をすることは寧ろ少年の自然で、將來成長の後に大事業をする上の準備だとも謂へる。一枚の硝子戸を破り、一本の障子の骨を折るにも、そこに尊い意味が含まれて居る。此少年の本能をよく理解しない家庭では、一寸した惡戲をしても直ぐに叱り飛ばすが、叱られたからとて子供の惡戲が止むべきものではない。其れが止まない許りでなく、叱責に伴ふ一種の脅迫から親の眼を隱れて惡戲を爲るか、若くは惡戲の結果に就て無責任な詐りを言ふようになり、往々にして夫れが昂じて頑固な嘘言癖になるのである。

少年が惡戯をした後で、『私がしたのでない』といふ樣な詐りを云ふた場合は、惡戯の結果に就ての批判や叱責から切離して『詐り』其者に就て、十分に訓戒を與へなければならない。此場合訓戒者は、惡戯の結果に對して無關心で有り得る丈け、其丈け『詐り』に對する訓戒の效果が表はれる。若し結果に就て無關心であり得なければ、詐りに就ての訓戒は、其效果を失つて仕舞ふのである。ワシントンの父の戒めは有名な話だが、どうか吾々の家庭でもそう有りたいものだと思ふ。

阿諛

次に少年には一般に阿諛の傾向がある。父母に阿諛し、兄姉に阿諛し、總て勝れる者に阿諛し其歡心を求むる傾向が有る。繼母の手に生育した少年や主家に酷使せらるゝ少年には特に其傾向が著しい。而して此少年の阿諛の傾向は、畏怖怯懦の性を馴致し、讒て虛僞性に導くものである事を注意しなければならないのである。

復讐

次に少年の嘘言癖は復讐に原因する場合が有る。例へば、友達から虐げられて口惜しくて堪らないが、友達は自分より年も上であり、腕力も勝れて居る。到底普通のことでは、之に對抗することが出來ないと云ふ場合に、復讐の武器は『詐り』より外にない。だから、抵抗力の無い少年に向つて肉體的の痛苦を與へることは、如何なる場合に於ても—假令其が瞬間的のものであつたにせよ、大なる罪惡であることを知らねばならぬ。少年の燃ゆる反抗心は、遂に彼を驅つて虛僞性の渦中に投せしめなければ止まぬのである。

兒童虐待防止運動

兒童の虐待防止に關する運動は、未だ我國に於ては殆ど閑却されて居ると云つても宜いが、歐米の先進國に於ては、從來熱心に研究され實行されて居る。現に紐育に兒童虐待防止會と云ふやうなのがあつて、此會に屬して居る巡視員は、絕へず各家庭を廻つて、兒童の虐待を防止することに努めて居る。千八百七十四年に此會が成立されて以來、昨年迄の間に取扱つた件數は約二

十萬に上り、保護せられた兒童の數は四十萬人を超へて居ると云ふことである。

此兒童虐待防止會はどう云ふ所ら起つたものかと云ふと、今より八十年許り前卽ち千八百四十四年に、米國でエレンと云ふ少女が繼母の爲に虐待されて居るのを、或る宣敎師が救護した事が一つの動機となつて、爾來兒童の虐待防止に關する議論が高唱されたのである。其後英國には、千八百八十三年に、フレデリツク、アグニユーと云ふ人が、矢張り此と同樣の會を組織した。佛蘭西では千八百八十七年にジユールシモンと云ふ人が組織し、獨逸では其翌千八百九十八年にフオン、オイルツエンと云ふ人が組織して居る。日本では原胤昭といふ人が中央慈善協會といふものを組織して居るが、規模が極めて小さく到底も外國の比較にはならない。

斯くの如く歐米各國では、現今兒童の虐待を防止する社會的運動が頗る盛んになつて居るので、現に大正七年にはブラツセルに於て兒童の保護に關する萬國會議が開かれ、第一に提出せられた議案は、兒童の虐待を如何にして防止するかと云ふのであつた。

虛榮

次に嘘言癖は虛榮心に原因する場合がある。

前にも屢々述べた樣に、少年は一般に優勝慾が强烈である處から、其滿足を貪らふとする虛榮心が因を爲して、嘘言の習慣を作る場合が多い。よく少年が集つて自慢話をして居るのを聽くと、自分の家には金の茶釜が十もあるとか、未だ此外にも玩具が澤山あるとか云ふ風に、互に誇り合つて居ることが多い。斯う云ふ一種の虛榮心から、知らず識らず嘘言の習慣が生ずる場合があるのである。

興味

嘘言は又興味から來ることがある。

元來少年は諧謔性に富んで居るため、人を惑はし懲らしめることに趣味を

持ち易い傾向がある。路傍で道を問はれた時、知つて居ても知らぬと答へ、或は故意と違つた道を教へて遣る。そんな事が彼等にとつては堪らなく嬉しいのである。

最後に嘘言癖中最も悪性のものは、利慾から來る場合である。是は最も恐るべきもので、こう云ふやうな傾向が見へた時は、餘程病的に昂進したものと見て差支ない。

第四　買喰癖

(一)　間食の必要

間食は俗に「お八つ」とか「お三時」とか謂つて孰れの家庭でも行はれて居るが、是れは少年の營養上極めて重大な問題である。

屢々述ふるが如く、少年の身體の發達は、到底青年の比ではない。殊に消化機能の異常の發育に伴つて、間斷なく新陳代謝が行はれる結果、常に空腹を感じ易いものである。だから、少年は到底三度の食事のみを以て、其營養本能を滿足せしむることは出來ない。必ず其間に適當の食物を攝取しなければならぬのは當然である。

(二)　間食の弊害

間食には常に一定の規律と分量がなければならない。然らされば、往々にして是れが原因となつて、最も恐るべき不良性を發揮する場合がある。

之れを要するに、間食は少年にとりては、極めて必要な營養で、保護者は少年に對して適當なる間食を供給すべき義務があることを忘れてはならない。然るに、一般の家庭では此當然の義務を忘却して、間食を與へることを恰も一つの恩惠の如くに考へて居る者が有るのは誠に遺憾な事である。例へば大人しいから菓子を上げるとか、御用を達したから菓物を上げよふと云ふ樣に、間食を少年に供與することを以て勞力に對する報酬と考へて居る者が

有り、從て少年も亦自己の柔順や勞力に對しては常に或報酬を要求する傾向が免れないのである。

米國のスタンレーホールは少年と間食との關係に就て詳細に論じて居るが右に述べた樣な習慣を少年に與へることは、其精神上に甚だ惡るい影響を與へるものである。殊に他家の少年が御用達しに來た時、菓子や果物などを包んで與へる習慣が有るが、是は少年の品性陶冶の上にも極めて有害である。こういふ慣習は少年の眞摯な眞面目な精神を阻害する計りでなく、若しも少年の期待に反して報酬が與へられなかつた時に起る不平は、寧ろ少年の眞面目な思想を根抵から破壞して仕舞ふのである。

殊に間食は前にも述べた如く常に一定の規律の下に（時間の上にも分量の上にも）行はれなければならないから、保護者の知らない間に間食を與へられることは、少年の衞生上から寧ろ有難迷惑である。だから他家を訪問した時偶其家の子供でも同席して居る場合に、テーブルの菓子を惜氣もなく摑んで『へー坊ちやんにも』と云ふ風に、少年の保護者には全然沒交渉に供與するのは甚だ宜しくない事である。

盜性

又間食を一つの恩惠の如く考へて居る結果、動もすれば子供に間食を與ふべき時期が來ても猶ほ之を與へないことがある。又與へやうと思つても、主婦が外出したゝめ子供に與へることが出來ないやうな場合もある。然し間食は前に述べた如く、兒童にとつては缺くべからざる必要物であるから、兩親が外出でもして他に間食を與てくれる人が居ない場合には、戸棚の中を搜し廻つて菓子を盜んで喰ふことがある。こういふ場合が繰返される間に、知らず識らず盜性といふ恐ろしい惡癖がつくのである。

少年と金錢

少年は元來金錢には極めて恬淡で、寧ろ其魔術的効用に恐怖心を持つて居るものであるが、交友の摸倣や、其他の原因から、次第に金錢の便利を知り、

之れに對する一種の愛着、憧憬の念が起つて來ると、前に述べた盜性が、間食物より金錢に方向を轉じて來る。果ては、母親から頂く結構な菓子よりも、一錢二錢の駄菓子を買つて喰ふ事が面白くなる。一寸戸外に出ても何處かに駄菓子屋はないか、しるこ屋はないかと云ふ風に見て廻る。終には外出癖がつき、所謂浮浪性や浪費性を導き、始めには自分の家庭から金錢を盜んで居た者でも、次第に親戚や友人の金錢を盜む樣になり、とう〳〵救ふべからざる不良少年に陷つて仕舞ふのであつて、此間食といふことは少年の敎育上極めて重大な問題である。世の家父主婦たる者はよく〳〵注意すべきことであると思ふ。

浮浪性と浪費性

第五　射倖性

(一)　競技と賭事

如何なる民族の間にも、競技や賭事の行はれない處はない。近項オリンピックの競技に就て頻りに新聞を賑はして居るが、どんな文明人でも又どんな野蠻人の間にも何等かの競技或は賭事の行はれない處はないのである。昔羅馬に屢々國際的の競技が行はれたことは有名なことであるが、競技は其時代と民族の文化の程度を知る一つのバロメーターと謂つても宜い。

始めは一家族の娯樂に過ぎなかつた競技も、漸次一部落の娯樂となり、更らに一地方一民族の娯樂となり、遂に國際的の娯樂として行はれるようになるのである。

競技と最も似て居るものは賭事であるが、一般に少年は競技や賭事を好む傾向がある。此偶然の勝敗を以つて利得を爭ふ性質が、卽ち次に述べようとする射倖性である。

(二)　射倖性の原因

少年が射倖性に富んで居る一つの原因は、優勝慾が非常に强烈である結果

に外ならない。是れは屢々述べたことであるが、動物には凡てのものを征服し之れを支配しようといふ所謂支配本能がある。此本能は少年時代に於て最も著るしく現はれるから、詰らない競技に對しても、少年は非常な興味を持ち傍で見て居ると馬鹿々々しく感じる位である。

少年の射倖慾が強烈である他の一つの原因は、想像作用の旺盛な結果と見ることが出來る。少年は經驗が乏しく理智に暗い結果、常に夢の様な空想を描いて、自分の考へて居る事はなんでも實現することが出來るものであると思ひ込む傾向がある。少年の射倖性は卽ち其結果に外ならない。

尤も射倖性は獨り少年にのみ特有な性癖ではない。投機業者や相場師といふ様な種類の人は、相當な地位や財産が出來ても、一生賭事は止められないと云ふ者もあるが、是は射倖性が殆ど病的に昂進した者である。所謂一攫千金を夢見るの徒は總てが此類である。此種の思想は健實な思想を荼毒するの外ならない。

一種の危險思想として最も排斥すべきものである。何れの國家に於ても、賭博を犯罪として禁止して居ない所が無いのは、全く其爲めである。尤も西歐のモナコでは、公然國家が賭博を許容して居るが、此れは國家の財政上の特別の事情に出づるものである。

之を要するに少年の射倖性は、前述の如く、其本能的な優勝慾と射倖慾とに原因するものであるが、一面少年の摸倣性に原因する場合が頗る多いのは注意すべきことである。

公園や廣場といふ様な兒童の遊戲場に近く住む少年の間には、多く賭事を好む風があるのは、吾々のよく經驗する所であるが、どうしても兒童の集る場所には、之等の賭事が行はれ易い傾向があるのは免れない。

少年の射倖性は餘程注意して之れを矯正しなければ、往々にして少年の精神上に大なる變化を與へ、其全人格を低下せしむる虞がある。卽ち眞面目に

働いてその所得で生活すると云ふ着實な思想が、次第に失はれて、怠惰逸安の風を馴致し、萬一を僥倖しやうとする一種の射倖的貪慾性を高めるのである。

貪慾性

凡ての犯罪に就て、其原因を見るに、貪慾性に出づるものが大部分を占めて居ることは掩ふべからざる事實で、少年教養上最も警戒すべき點である。

射倖的遊戲

少年の射倖性は又一面には少年の感情を昂奮せしめ、觀察力を減殺する結果、事物に對する注意力が一般に散慢に流れ易くなることは注意すべきことである。平生は睦しい間柄の友達でも、一旦勝負事に熱中すると、忽ち怨敵の如き態度を示し、果ては殺伐な慘忍な事でも敢てするようになるのは全く其が爲めである。

斯くの如く少年の射倖的遊戲は、少年の心理に復雜なる最も憂ふべき影響を與ふるものであるから、最愛なる子女を持つ者は須く彼等をして之に近づかしめざることが肝要である。

第六　浮浪性

(一)　浮浪の心理

前にも一寸述べたやうに、人間は誰でも現在の境遇には滿足の出來ないものである。現在の境遇から遁れて、もつと明るい樂しい望みの場所に行かふと、常に惱へ苦しんで居るのが、寧しろ人間生活の常態であるが、少年には特に此思想の傾向が著しい。道を行くにも眞直ぐには步かない。或は右顧し或は左眄し、人だかりがあれば其中に潛り込んで一時間でも二時間でも立つて居るといふ風に、用達しに出ても道草に氣が奪はれて、肝心の用を忘れて仕舞ふことが多い。此傾向が卽ち次に述べようとする浮浪性で、不良少年の多數は悉く此浮浪性の經路をとつて來ない者はないのである。前に述べた買喰癖の如きも、浮浪性を助長する一つの原因である。

第二、浮浪性の原因

環境　浮浪性はどう云ふ所から來るかと云ふと、多くは環境―自分の周圍の事情から來る場合が多いのである。倫敦で一年間に浮浪者を取扱ふ數は十一萬人に達すると云ふことであるが東京なども相當多數に上つて居ることゝ思ふ。英國のフレデリック、アグニユーと云ふ人の調査した處に依れば浮浪兒童の五十七%は家庭の虐待から來るといふ事である。此人は一千八百八十三年に兒童虐待防止の目的から一種の保護事業を起した人であるが、爾來佛蘭西にも獨逸にも同種の保護事業が盛んに興つて來た。少年の浮浪性は其環境に支配される場合が多いことは、浮浪兒に繼子が多い事實が一番よくその消息を示すものである。

兒童の躾　序に兒童の躾方に就て、一言述べようと思ふ。

父親は極端に嚴格であるが、反對に母親は非常に子煩惱であると云ふやうな家庭には、往々にして不良の兒童を出だす事が多い。で、どうしても、兒童の躾けの上には、兩親が全く同じ考へになり、同じ方針の下に同じ信念を以て之れに當るといふ事が、兒童教育上最も必要なことであると思ふ。

家庭の娯樂　吾々の家庭は常に温情とさうして娯樂に充ちたものでなければならぬことは謂ふ迄もない。餘り嚴格すぎたり、反對に溺愛的な家庭は、宜しくないことは勿論、兒童に娯樂を與へる餘裕のない家庭は眞に兒童の爲めに不幸なものと謂はなければならない。

若し家庭に娯樂が缺けて居たならば、兒童は勢ひ他に娯樂を求めやうとするのは必然で、知らず識らず浮浪性に導く結果になるのである。此浮浪性の不良少年の大部分は、こうした家庭の缺陷に原因する場合が多いことは注意すべきことである。

摸倣　次に浮浪性を助長する原因の一つは謂ふ迄もなく摸倣である。少年時代は

非常に摸倣性が強烈であることは、度々繰返し述べた處であるが、活動寫眞や刊行圖書から受ける影響は最も甚だしいものが有る。彼等は往々にして自ら書中の人となり、好んで狂逸な言動に出づることが有るのみならず、單純な摸倣の興味から怖るべき不良性を發揮するに至ることは、吾々の常に經驗する處である。故に少年の觀覽物や愛讀書の選擇には、終始最善の注意を拂はなければならぬことは勿論である。

誘惑

浮浪性は又誘惑に原因する場合がある。

すべて少年は感情の動搖し易い、さうして感受性の非常に鋭敏なものであるから、僅かな刺戟に對してもすぐ之に動搖し感激するのである。唯何と云ふ譯もなしに、家出をして見ると云ふやうな場合もある。殊に精神薄弱な少年には、往々にして家出癖を生ずることがある。彼等は二三ヶ月の間家を飛出して、何處をどう云ふ風に彷徨して來たものか、自分で自分の事が判らないほどしまふのである。

尤も此彷徨癖は單り少年に限つた譯ではなく、吾々でもよくさう云ふことを經驗する事がある。卽ち外出癖が附くと一晩でも家に凝乎として居ることは非常に苦痛になり、何か罪惡でも犯して居る樣な一種の脅迫觀念に襲はれるものであるが、無理に一晩でも二晩でも書齋に閉籠つて讀書でもすると、今度は反對に外出することが非常に苦痛になり罪惡でも犯すやうな感じになるものである。斯う云ふ外出癖、浮浪性は寧ろ人間の本性であるかも知れない。赤ん坊が少し手足が動くやうになると、一室にぢつとして居ることは出來ず、何所といふ目當てもなく只這ひ廻るのは浮浪性が人間の自然であり本

能であることを示すもので、此本能的性癖は最も矯正し難い一つである。

先にも一寸紹介した山口縣の本間俊平先生は、數十年來山中の倭屋に天下の不良少年を集め、自ら其慈父となり教師となりて、獻身的に彼等の感化救濟に努めて居られるが、其奥さんは又稀に見る賢婦人で、少年の着物の世話から食事萬端を一人で引受けてやつて居られる。私も數回先生を訪ね、其教を受けたが、先生に就て面白い逸話が有る。先生の許に養はれた一人の不良少年は、始めの間こそ殊勝らしくも見へたが、次第に眞面目な信仰生活に飽き、もとの放浪生活に復らふといふ考が起つて來だ、こうなつては先生の尊い教訓も夫人の温い慰めの言葉も少年の耳には最早這入らない。只管先生の許を逃走する機會を窺つて居た。然し逃走するにしても先立つものは金である。どうかして大金を盗出さなければならぬ。先生は屹度金を持つて居るに違ひないと云ふ所から、神樣のやうな先生を殺さうと決心したのである。

それは丁度今から八年許り前のことであるが、或夜少年は窃に職業用の玄能を携へて、先生の寢室に忍入り、前後不覺に寢て居る先生の腦天に物をも謂はず突然殴り付けた。今でも先生の後頭部には當時の創跡が殘つて居る。室内はサツと鮮血迸り先生は虚空を摑んで其場に倒れた。然し氣丈な先生は氣息奄々たる中にも、我を忘れ惡魔の様な少年の手を取つて、自分は今此處で殺されても宜いが、少年の罪はどうぞ許し給へと神に祈られた。流石の少年も此瞬間に飜然として我に歸り、其場に玄能を抛棄て、先生の前にひれ伏して心から懺悔した。それ以來少年は先生の爲めには自分の凡てを棄てなければならぬ、此山の土となるまでは先生の許を離れないと堅い決心をしたのである。彼は爾來今日でも先生の側を離れず、多くの少年の兄となり友となり只管先生の感化事業を助けて居るのである。

斯う云ふ風に少年の浮浪性はなか〳〵矯正し難いもので、一旦浮浪性が病

的に昂進した以上は、假令一時それが癒つた様に見へても、何かの機會に僅の刺戟に依つて再びムラ〳〵と其性癖が現はれて來る。故に此浮浪性は、其初期に於て餘程注意して矯正して置かなければ、將來取返しのつかぬ者となるのである。

第七　殘忍性

(一)　殘忍の心理

元來動物には鬪爭本能と云ふものがある。之れは生存競爭の結果であつて、寧ろ動物の本性に出づるものである。平和の使と謂はれる鳩でさえ、其群れに一摑みの豆を投ずれは、彼等は互に其餌食を奪合うに違ひない。多くの男性の前に一人の女性を抛げたならば、多くの男性は牙を鳴らして其女性を奪合はずには置かない。營養本能、性慾本能に伴ふ所の自然の狀態は此鬪爭である。此意味から見ても、鬪爭は動物として免れない一つの本能であると謂ふことが出來るのである。

此鬪爭本能から來る性癖の一つは破壞本能である。破壞本能に就ては前章にも一寸述べたが、少年は常に其本能の滿足の爲めに破壞し得べき有らゆる材料を物色して居る。障子を破つたり、硝子窓を壞はしたり、あらゆる方面に破壞材料の發見に努めて居るのである。

以下述べんとする殘忍性なるものは、畢竟其間に自然に釀成せらるゝ一つの性癖に外ならないので、換言すれば、殘忍性は寧ろ人間の本性であると謂つてもよい。同情とか惻隱とかと云ふ高尙な道德觀念は、人間の自然の本能を抑制して行くに過ぎない。若し之れを抑制する高尙な心の働きが無かつたならば、人間は徹頭徹尾殘忍性のものであるに違ひないと思ふ。

惡名を天下に唱はれた彼の山田憲の殘忍な行爲は、當時人々の膽を寒からしめた事件であつた。鈴木辨藏と云ふ男を殺し、五體を散々に切り刻んでト

ランクに入れた儘信濃川の奔流に抛込んだと云ふ世にも怖ろしい犯罪で、審判の結果死刑を科せられたのは當然である。

然し私は彼の事件に就ては、こんな考へを有つてる。山田憲が鈴木を殺して手足を斬り刻んたと云ふことは、見やうに依つては如何に彼れが良心の苛責に堪え得なかつたか、彼自身の犯行を抹殺せざれば止まざる彼の道義心の叫びが、如何に強烈であつたかと云ふことを證據立つる材料にもなりはしないかと、其當時友人の判事に話したことがある。

吾々が自分の行ひに惡かつたと云ふことを痛感する場合は、どうかして其事實を始めから無いものにしたいと云ふやうな感じを起することがある。現實を夢にしたいと思ふことさえあるのである。戀に破れた男が懊煩の極、最愛の婦人の胸に兇刃を閃かすのは、決して彼女を憎惡する爲めではない。彼女は彼の光である、命である、彼女を離れては最早彼の光も命も無いのである。彼の慰めは寧ろ彼女の死である。彼女の一切を無に歸せしむることが、彼の最後の慰めを得る所以で、其が彼の憐むべき滿足に外ならないのである。

山田憲の行爲は假令强盜の爲めであるにせよ、或は感激の突發に出でたにもせよ、兎に角人間一人を殺して仕舞つたのである。轟く胸を押へて靜に吾れに歸つた時、あゝ了つたどうして斯んなことをしたらふ、我ながら自分の爲た事が判らない。今眼の前で演ぜられた恐ろしい活劇が一つの夢であつて欲しいと云ふやうな考を起したに違ひない。此盡きざる痛恨と堪へ難き良心の苛責とによつて、彼は屍體の骨も肉も斬り刻んで仕舞ふと云ふやうな考を起したのではないかと云ふやうなことを私は考へて見たのである。然し此私の考が誤つて居て、山田の行爲は徹頭徹尾殘忍性に出でたものであるとするならば、彼の行爲は眞に怖るべきもので、恐らく病的に昂進した彼の殘忍性の發露であると思ふ。